佐賀県文化財調査報告書第178集

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書２

勝尾城下町遺跡

平成20（2008）年９月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第178集

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書２

勝尾城下町遺跡

平成20（2008）年９月

佐賀県教育委員会

序

本書は、佐賀県教育委員会が独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けて、平成17～19年度に実施した九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の報告書です。

今回の報告は、鳥栖市勝尾城下町遺跡に関するもので、古代の墓地、中世の城郭跡等を調査しました。勝尾城下町遺跡は、勝尾城筑紫氏遺跡として一部史跡に指定されていますが、今回の調査で総構え空堀の延長が確認されるなど、遺跡周辺部の状況を知る上で貴重な調査例となりました。

本書が学術文化の向上に寄与するとともに、地域の歴史を理解する上でその一助になれば幸いに存じます。

発刊にあたり、埋蔵文化財の保護に深い御理解と多大な御協力を賜った独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構及び関係各位に対して心から御礼申し上げます。

平成20年９月

佐賀県教育委員会

教育長　川﨑俊広

例　言

1　本書は、九州新幹線建設に伴い平成17～19年度に実施した佐賀県鳥栖市に所在する勝尾城下町遺跡の発掘調査報告書で、九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書の第２集である。

2　発掘調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局の委託を受け、佐賀県教育委員会が主体となり実施した。

3　発掘調査にあたっては、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局、鳥栖市教育委員会及び地元各位の協力を得た。

4　図版・写真図版の一部には、鳥栖市教育委員会から提供を受けた図版・写真を使用した。

5　調査記録作成、整理作業に従事したものは次のとおりである。

遺構実測：田中健一郎・嘉村哲也・㈱埋蔵文化財サポートシステム・㈱とっぺん

遺構写真：田中健一郎・㈲空中写真企画

遺物整理：古賀美江・徳永美穂子・山口カズヨ

遺物実測：一番ヶ瀬富士子・上瀧光子・山口美佐子

製　　図：岩橋由季・馬場里美・渋谷　格・田中健一郎

遺物写真：渋谷　格

6　佐賀県教育委員会作成の遺跡台帳に登録した勝尾城下町遺跡の略号は、KATである。

7　遺構名は、遺構の種別を表す分類記号と遺構番号の組み合わせで示し、分類記号は次のとおりである。

SA：柵列　　SB：掘立柱建物　　SD：堀・竪堀　　SH：竪穴住居

SK：土坑　　SP：火葬墓　　SX：その他・不明遺構

8　調査時の記録類はすべて日本測地系による旧国土座標であり、混乱を回避するため、新幹線鹿児島ルート路線内文化財調査では世界測地系による座標は使用していない。

本書で示す方位は、日本測地系による旧国土座標第Ⅱ系の座標北である。

9　実測した出土遺物には、８桁の遺物登録番号を付した。

10　表で示した出土遺物の計測値は、復元値に＊を付けて表現する。表中のMFは微細剥離痕のある剥片を意味する。

11　出土遺物、図面・写真などの記録類については、佐賀県教育委員会（佐賀県文化財調査研究資料室）で保管している。

12　本書の執筆は、第１章、第２章１・２、付編を渋谷格、その他を田中健一郎が行った。

13　本書の編集は、田中健一郎の協力を得て渋谷格が行った。

14　勝尾城下町遺跡の発掘調査にあたって、下記の方々から御教示・御協力をいただいた。

石橋新次　　内野武史　　大坪芳典　　高尾平良　　時枝　務　　徳永貞紹

宮武正登　　森田孝志　　山本信夫　　（五十音順）

目　次

本文目次

第１章　調査の経過 …… 1
1　調査の経緯 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 2
3　調査組織 …… 2

第２章　位置と環境 …… 5
1　地理的環境 …… 5
2　歴史的環境 …… 7
3　勝尾城 …… 11

第３章　調査の記録 …… 16
1　概要 …… 16
2　１区の遺構 …… 21
3　２区の遺構 …… 24
4　３区の遺構と遺物 …… 24
5　１・３区の遺物 …… 37

第４章　まとめ …… 42
1　火葬墓について …… 42
2　石垣について …… 42
3　調査区の位置付け …… 43

付編　幸津遺跡補遺 …… 63
1　はじめに …… 64
2　弥生・古墳時代 …… 65
3　奈良・平安時代 …… 67
4　近世 …… 72
5　小結 …… 77

挿図目次

図1　佐賀県内の新幹線鹿児島ルートの路線（1/30,000）……3
図2　勝尾城下町遺跡の位置（1/500,000）……5
図3　鳥栖市内の主な遺跡の分布（1/60,000）……8
図4　勝尾城下町遺跡全体図（1/18,000）……12
図5　調査区周辺の地形、調査区の位置（1/1,500）……17・18
図6　1区の遺構分布（1/200）……19・20
図7　SX01（1/60）……21
図8　SX02（1/60）……22
図9　SX03・06（1/60）……23
図10　2区の遺構分布（1/200）、SD04の土層（1/60）……25
図11　3A区の遺構分布（1/200）……26
図12　3A区の土層（1/80）……27
図13　3区トレンチの土層（1/80）……28
図14　SP12・16（1/10）、出土蔵骨器（1/3）……30
図15　SP13（1/10）、出土蔵骨器（1/3）……31
図16　3B区・周辺の遺構分布（1/200）……32
図17　3B区の土層（1/100）、周辺トレンチの土層（1/80）……33
図18　SX10（1/20）、SK11（1/40）……34
図19　3区里道周辺の地形（1/500）……35
図20　3区里道の土層（1/100）……36
図21　1・3区出土弥生時代～近世の遺物（1/3、27は1/2）……37
図22　1・3区出土縄文時代の遺物1（1/3、35は1/4）……38
図23　1・3区出土縄文時代の遺物2（1/2）……39
図24　調査区周辺の地名（1/6,000）……45・46
図25　幸津遺跡の遺構分布（1/200）……64
図26　SB19（1/60）、出土遺物（1/3）……65
図27　SH05・06（1/60）、出土遺物（1/3）……66
図28　SX12（1/30）……68
図29　SX13・浦田遺跡出土遺物（1/4・1/3）……69
図30　奈良・平安時代の遺物、徳富権現堂遺跡出土遺物（1/3）……70
図31　SA20・21（1/40）、出土遺物（1/3）……71
図32　調査区周辺の地形（1/5,000）……73
図33　調査区周辺の地形詳細（1/500）……74
図34　調査区の土層（1/60）……75
図35　近世・近代の遺物、今泉遺跡出土遺物（1/3）……76

表 目 次

表１　縄文時代～近世の出土遺物 …… 40
表２　縄文時代の出土石器 …… 41
表３　幸津遺跡の出土遺物 …… 78

写 真 目 次

写真１　SP12火葬骨 …… 31
写真２　SP16火葬骨 …… 31
写真３　SP13火葬骨１ …… 31
写真４　SP13火葬骨２ …… 31

写真図版目次

写真図版１ …… 49
調査区周辺の空中写真（昭和22年米軍撮影）　調査区遠景（東から）
写真図版２ …… 50
１区全景（西から）　１区全景（南東から）　２区全景（東から）
写真図版３ …… 51
SX01（南東から）　SX01（北西から）　SX02（西から）　SX02北西隅（北西から）
SX06（南西から）　SX03（E面）・SX06（北東から）
写真図版４ …… 52
SX03（D面）（北から）　SX03裏込め石　SD04土層（北東から）　SD04（東から）
山浦新町遺跡総構え空堀（鳥栖市教委提供）　山浦新町遺跡総構え空堀土層（鳥栖市教委提供）
ほ場整備以前の総構え空堀の痕跡（鳥栖市教委提供）
写真図版５ …… 53
３区南斜面全景（東上空から）　３B区周辺（北上空から）
写真図版６ …… 54
３B区全景（北から）　SX10（北から）　３B区東壁土層（西から）　３B区南壁土層（北から）
３区Aトレンチ北壁土層（南から）　３区９トレンチ南壁土層（北から）　SD05（北から）　SD07（北から）
写真図版７ …… 55
３区１トレンチ北壁土層（南から）　３区７トレンチ西壁土層（東から）　３区里道（真上から）
３区里道（西から）　３区里道調査前状況（東から）　３区４トレンチ土層（西から）
３区13トレンチ土層（西から）　３区13トレンチ土層（北東から）

写真図版８ …… 56
SP12（東から）　SP13（北から）　SP16（西から）
写真図版９ …… 57
３A区全景（東から）　３A区西壁土層（東から）　SP12火葬骨出土状況（東から）
SP13検出状況（南から）　SP13土層（北から）　SP16土層（東から）
３A区縄文土器出土状況　３A区縄文土器出土状況
写真図版10 …… 58
縄文時代の土器
写真図版11 …… 59
縄文時代の石器
写真図版12 …… 60
弥生時代の遺物　古墳時代の遺物　SX01出土遺物　奈良・平安時代の遺物
写真図版13 …… 61
SP12蔵骨器　SP16蔵骨器　SP13蔵骨器　SP13出土遺物
写真図版14 …… 62
中・近世の遺物
写真図版15 …… 80
霞堤周辺の空中写真（昭和23年米軍撮影）　調査区遠景（北東から）
霞堤副堤（東から）　調査前現況（東から）　上川原堰（北から）
写真図版16 …… 81
CD土層東半部（北から）　CD土層西半部（北から）　EF土層中央部（東から）
EF土層（北から）　AB土層（西から）
写真図版17 …… 82
越州窯系青磁椀　SH05出土土器　青磁水注　平安時代の遺物
写真図版18 …… 83
近世～近代の蔵骨器　蔵骨器各種

第１章　調査の経過

１　調査の経緯

福岡県福岡市と鹿児島県鹿児島市を結ぶ九州新幹線鹿児島ルートは、一時計画が凍結されたものの、区間ごとに順次工事実施計画が認可され、平成16年３月13日にはJR新八代駅とJR鹿児島中央駅との間で部分開業されている。

鹿児島ルートの佐賀県内の区間は、鳥栖市内の11.7㎞である。本線部分については『幸津遺跡』に詳述されているように、昭和59年から文化財調査との調整が始まっており、平成13年４月25日に博多～船小屋間の工事が認可されたことにより、調整が本格化した。平成13・14年度は鳥栖市教育委員会、平成15・16年度は佐賀県教育委員会によってルート内の確認調査が行なわれ、本調査が必要となった幸津遺跡については平成16年度に調査を実施することとなった。

さて、鹿児島ルートの計画当初において新鳥栖駅の設置は計画されていなかったが、九州新幹線西九州ルートでは新鳥栖駅の設置が当初から計画されており、平成12年に政府・与党整備新幹線検討委員会において博多～船小屋間の着工が決定された際には鹿児島ルートに新鳥栖駅が設置されることとなり、またJR長崎本線への乗換えを配慮した新鳥栖駅の位置についての要望が佐賀県及び鳥栖市から提出されたことを受ける形で、鹿児島ルートの新鳥栖駅の位置が決定することになった。

ところが、新鳥栖駅に列車を停車させるために変電所が新たに必要となり、その変電所の位置について平成15年度から文化財調査との調整が始まった。駅からの距離の関係などのため、当時史跡指定候補であった勝尾城下町遺跡周辺に設置せざるをえないという条件の下、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、鳥栖市新幹線対策課、鳥栖市教育委員会、佐賀県空港・交通課（現：新幹線活用・整備推進課）、佐賀県文化課（現：社会教育・文化財課）の５者で協議が行われ、勝尾城下町遺跡の総構え空堀南側に隣接する鳥栖市市有地が候補として浮上した。

この地区は、昭和45（1970）年完成の河内ダム建設に関連する土取り工事などによって大規模に地形が改変されていたが、踏査の結果、南斜面を中心に城郭関連の遺構が存在する可能性があったため、平成16年３月１日～３月10日にかけて佐賀県教育委員会と鳥栖市教育委員会によって約1.4haを対象に確認調査を実施した。その結果、総構え空堀が削平を受けずに当初予想されていなかった南斜面にかけて遺存していることや石垣、竪堀跡などが確認され、斜面部を中心に勝尾城に関連する可能性がある遺構が残存していることが分かってきた。

さらに、変電所の面積が市有地だけでは狭く、この部分だけで設置した場合のコスト面などが問題となり、東側の民有地に拡張する案が提起されるなど、調整が続いた。また、これらの調整については、鳥栖市教育委員会が設置する勝尾城下町遺跡調査・整備委員会でも随時検討が行われた。以上のような調整を重ねながら、最終的には市有地と民有地内の約21,000㎡が調査対象地となった。

2　発掘調査の経過

九州新幹線新鳥栖変電所建設に伴う勝尾城下町遺跡の調査は、用地買収の関係などから発掘調査が可能になった部分を順次調査していく形で進められた。

平成17年度は、平成17年10月１日に県知事と独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局長で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託」契約を締結し、12月12日から１・２区の調査を開始した。当初の予定から調査前の条件整備の遅れや天候不順により調査量が縮小したため、平成18年３月13日に変更契約を締結した。

平成18年度は、平成18年４月１日に発掘調査委託契約を締結し、８月１日～８月３日に変電所予定地西側の進入路及び調整池予定地を対象に確認調査を行ない、10月10日から３区の調査を開始した。当初の予定から地元調整の遅れにより調査面積が減少したため、平成19年３月15日に変更契約を締結した。

平成19年度は、平成19年４月１日に発掘調査委託契約を締結し、４月17日から３区の調査を開始した。当初の予定から調査面積の減少などのため、平成20年２月22日に変更契約を締結した。

調査記録や出土遺物の整理作業は発掘作業と並行しながら行い、本格的な報告書作成作業を平成19年度に行い、平成20年度に報告書を刊行した。

3　調査組織

調査主体　佐賀県教育委員会

調査協力　独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局
鳥栖市教育委員会
地元各位

調査組織（平成17～20年度）

総　括	佐賀県教育委員会　教育長	吉野健二（平成17～19年度）
	佐賀県教育委員会　教育長	川﨑俊広（平成19・20年度）
	佐賀県教育庁文化課長	初村健二（平成17年度）
	佐賀県教育庁文化課長	松永光生（平成18・19年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課長	江島秋人（平成20年度）
	佐賀県教育庁文化課　参事	東中川忠美（平成17～19年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　副課長	七田忠昭（平成20年度）
調査総括	佐賀県教育庁文化課　主幹	西田和己（平成17～19年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　係長	小松　譲（平成20年度）
調査担当	佐賀県教育庁文化課　主査	細川金也（平成17・18年度）
	佐賀県教育庁文化課　主査	渋谷　格（平成19年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主査	川副麻理子（平成20年度）
	佐賀県教育庁文化課　嘱託	田中健一郎（平成17年10月～19年度）

図１　佐賀県内の新幹線鹿児島ルートの路線（1/30,000）

庶務会計	佐賀県教育庁文化課　係長	中原吉朗（平成17年度）
	佐賀県教育庁文化課　主幹	佐伯勇次（平成18・19年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主幹	佐伯勇次（平成20年度）
	佐賀県教育庁文化課　主査	平尾和子（平成17～19年度）
	佐賀県教育庁文化課　主査	黒木文好（平成17～19年度）
	佐賀県教育庁文化課　主査	碇　一浩（平成17年度）
	佐賀県教育庁文化課　主事	山口徹也（平成17年度）
	佐賀県教育庁文化課　副主査	山口徹也（平成18年度）
	佐賀県教育庁文化課　主事	吉田顕徳（平成17～19年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主査	平尾和子（平成20年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主査	古川直樹（平成20年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主査	島田貴子（平成20年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主事	吉田顕徳（平成20年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主事	池田陽介（平成20年度）
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課　主事	古賀秀美（平成20年度）
調査補助員	石田智子・嘉村哲也	
発掘作業員	内田康徳・古賀道治・佐藤博昭・篠原英雄・城島文雄・生野幸雄・陶山尚史・寺崎　彪・徳渕直広・長家聖一・直塚　功・永戸政治・永渕笑美子・山田末子・吉岡　一	
整理作業員	一番ヶ瀬富士子・岩橋由季・江島美恵子・江副朋子・奥知恵子・桑原廣子・古賀弘美・古賀美江・上瀧光子・鶴田啓子・徳永美穂子・中島文子・増田好美・皆越弘子・村里育子・山口カズヨ・山口美佐子	

第１章　参考・引用文献

佐賀県教育委員会（2005）『佐賀県内遺跡確認調査報告書23』佐賀県文化財調査報告書第162集

佐賀県教育委員会（2007）『幸津遺跡』佐賀県文化財調査報告書第169集

第２章　位置と環境

１　地理的環境

勝尾城下町遺跡が所在する鳥栖市は佐賀県の東端部に位置し、西は三養基郡みやき町と、北は三養基郡基山町、また脊振山地を境に福岡県筑紫郡那珂川町と、東は福岡県小郡市と、南は筑後川・宝満川を境に福岡県久留米市とそれぞれ接している。鳥栖市役所での位置は北緯33° 22′ 40″、東経13° 30′ 20″（世界測地系）で、市域は南北約９km、東西約８kmの広がりを有し、面積は約71.7km²である。人口は66,058人、世帯数は24,710世帯（平成20年３月末現在）で、佐賀県内では３番目の人口規模の市である。

図２　勝尾城下町遺跡の位置（1/500,000）
国土地理院発行の20万分の１地勢図（福岡・熊本）を使用

市域のおおまかな地形は、脊振山地東端部の九千部山（標高847.5m）を最高所として南東に向かって傾斜していき、「筑紫次郎」と称される九州最大の河川である筑後川流域の低地に至るもので、山地、段丘及び扇状地、沖積地の三つに大別される。このうち、現在では市街地化により判別しにくくなった地域もあるが、段丘が発達していることが大きな特徴で、相対的な高さや構成層から高位段丘、中位段丘、低位段丘に区分されている。平野部は有明海北岸を取り囲むようにひろがる筑紫平野の奥部北西にあたり、朝倉平野の西端部を占める。

地形をやや微細にみていくと、九千部山塊から派生する三つの支嶺とその間を流れる河川が山地から段丘部の景観をなしている。北側は権現山（標高626.2m）から南東に杓子が峰（標高312.3m）を経て柚比・今町の高位段丘に通じる支嶺で、おおよそ基山町との市町境となっている。「鳥栖北部丘陵」あるいは「柚比丘陵」と呼称された段丘部は河川の開析作用による狭い谷が複雑に入り込んで八つ手状に丘陵が連なる独特の地形を形成していたが、近年の大規模区画整理事業によって大部分がその姿を消した。その南側の支嶺は九千部山から南東に城山（標高498m）を経て、群石山（標高201.1m）と終わるもので、現在の市街地がのる低位段丘が南東に続き、北側の支嶺との間に権現山を源流とする大木川が南東流している。三つ目は石谷山（標高754.4m）から南東に雲野尾峠（標高400.1m）に至る支嶺で、独立丘陵の朝日山（標高132.9m）・所熊山（標高113.5m）、北茂安丘陵群が南に続く。その南側を筑後川が流れており、この丘陵群によって佐賀平野と鳥栖市域は区切られている。後2者の支嶺の間に九千部山を源流とする安良川が山地を南東流し、平野部に出てからは南流している。また、石谷山を源流とする沼川が蛇行しながら南流しており、これらの河川はいずれも筑後川に注いでいる。

表層地質は、山地と丘陵に後期白亜紀の花崗岩類が分布し、朝日山一帯には三郡変成岩に属する縞状角閃岩が認められる。また、養父町の小丘には世界的に珍しい珪線岩を含む流紋岩が露出しており、鳥栖流紋岩と呼ばれている。高位・中位段丘面には鳥栖ローム（赤褐色おがくず状ローム）・八女粘土層と呼ばれる阿蘇4火砕流堆積物をのせている。沖積層は汽水域から淡水域で形成された非海成沖積層で、佐賀平野の蓮池層に対比される。

気候は、隣接する久留米市の平年値を参考にすれば、年平均気温16.0℃と温暖ではあるが、夏と冬の較差は大きく、特に夏は8月の月平均気温が27.4℃と暑く、有明海からの海風の影響が考えられている。年降水量は1919.3mmで、筑紫平野の中では比較的多雨域にあたり、年間日照時間は1767.5時間で、周辺の海岸部では1800時間を越えるのに対してやや日照時間が短い。北部九州内の微細な特徴はあるものの、全般的には温暖で、暮らしやすい気候といえよう。

さて、鳥栖市の九州島内における地理的な大きな特徴として、古来より交通の要衝であることが挙げられる。古代には官道である西海道、近世には長崎街道が通り、現在では九州縦貫自動車道（九州道）と九州横断自動車道（長崎道・大分道）が交差する鳥栖ジャンクションがあり、JR鳥栖駅で鹿児島本線と長崎本線が分岐するなど、九州の南北と東西を結ぶ重要な位置を占めており、九州新幹線が市内を通過するのも偶然のことではない。なお、現在では福岡市や周辺市町村との太い通勤・通学流動パターンが形成されており、福岡大都市圏の周辺市町村として考慮する必要がある。

2　歴史的環境

鳥栖市域は縄文時代以降豊かな歴史が育まれているが、歴史的環境全般については『鳥栖市史』『鳥栖市誌』などを参考にしていただき、報告の内容と関連が深い時代の考古学的所見を中心に概略したい。

旧石器時代については、ナイフ形石器・尖頭器・台形石器・角錐状石器などが柚比遺跡群・本川原遺跡・牛原原田遺跡・本行遺跡などで出土しているが、原位置から出土した例はない。

縄文時代になると、各時期で重要な調査成果があがっている。早期では、西田遺跡で早期のほぼ全時期の土器を伴って集石遺構108基・帯状配石遺構・落し穴状遺構などが確認されており、ある程度長期間の定住生活の拠点であった可能性がある。今町共同山遺跡では刺突文土器・押型文土器が出土し、牛原原田遺跡では集石遺構・落し穴状遺構が検出され、押型文土器・撚糸文土器が出土している。他に柚比遺跡群（岸田南・柚比梅坂・安永田遺跡）・山浦西北方遺跡などで押型文土器・貝殻文系土器が出土している。

前期では、柚比遺跡群（長ノ原・岸田南・柚比梅坂遺跡）で轟B式系・西唐津式系・曽畑式土器が出土しており、牛原前田遺跡で約1個体分の曽畑式土器が単独で検出され、山浦西北方遺跡でも曽畑式土器が出土している。

中期では、平原遺跡で多数の並木式土器を伴い集石遺構40基以上が確認されており、立地や石器組成などから定時的な野営地と推測されている。岸田南遺跡ではドングリ貯蔵穴や土坑が検出され、春日式系・阿高式土器が出土している。他に蔵上遺跡で春日式系・並木式系・阿高式系土器が出土し、西田遺跡で船元式土器が倒置した状態で検出されている。

後期では、蔵上遺跡で三万田式土器を中心とする多量の遺物を伴って竪穴住居10棟・土器棺墓41基などが確認され、土偶や石偶、十字形石器などが豊富にみられることから後期後葉の拠点的な集落であったと推測される。他に柚比梅坂遺跡で御領式系土器、桑ノ木添遺跡で鐘崎式系・北久根山式系土器、山田遺跡で阿高式系土器が出土している。

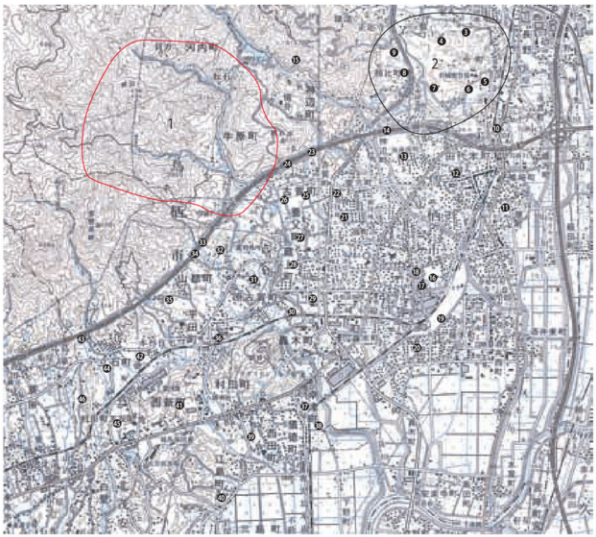
晩期では、黒川式期に安永田遺跡で土器棺墓、本川原遺跡で貯蔵穴、惣楽遺跡で集石遺構・土坑などが検出されており、平原遺跡では良好な包含層が確認されている。晩期後半（弥生時代早期）では永吉遺跡で小壺を伴い有柄式石剣が出土しており、三本松遺跡で甕棺墓が確認されている。

弥生時代前期の集落としては、柚比遺跡群（八ツ並金丸・今町岸田・長ノ原遺跡）・古賀遺跡・牛原原田遺跡・京町遺跡・幸津遺跡などがあり、八ツ並金丸遺跡では環濠、幸津遺跡では環濠と推定される大溝が確認されている。墳墓としては、八ツ並金丸遺跡で土坑墓を主体とする墓地が検出され、前期末になると柚比遺跡群（安永田・フケ遺跡など）・三本松遺跡などで甕棺墓地が出現するようになる。

弥生時代中期は、北東部の柚比遺跡群と南西部の村田・江島遺跡群を中心に遺跡数が爆発的に増加し、首長墓や青銅器生産が確認されるなど特筆される時期となる。柚比遺跡群では大規模開発に伴う調査などにより貴重な成果があがっている。柚比本村遺跡では銅剣などを集中的に副葬する首長墓群と大型掘立柱建物が一体となって空間を形成しており、この遺跡群の中心として位置づけられる。安永田遺跡では炉状遺構や鋳型、平原遺跡・大久保遺跡・柚比本村遺跡・前田遺跡では青銅器鋳型が確認され、この

時期の青銅器生産地の一つとなっている。平原遺跡・大久保遺跡などの大規模な集落、八ツ並金丸遺跡・柚比梅坂遺跡・安永田遺跡などの大規模な甕棺墓地と合わせて、柚比遺跡群が中期の中核的な集落であったことを窺わせる。村田・江島遺跡群では調査例が少なく、不明な点が多いが、本行遺跡では青銅器生産に関わる遺物が多数出土しており、もう一つの中心地と考えられる。

弥生時代後期になると、上記二つの遺跡群でも規模を縮小しながら集落が営まれているが、中心は低位段丘上の遺跡に移っているようである。集落としては、柚比遺跡群（平原・長ノ原遺跡）・本原遺跡・牛原原田遺跡・牛原前田遺跡・蔵上遺跡・内精 遺跡などがあり、平原遺跡・藤木遺跡・本行遺跡では環



1 勝尾城下町遺跡　2 柚比遺跡群　3 八ツ並金丸遺跡　4 今町共同山遺跡　5 岸田南遺跡　6 平原遺跡　7 大久保遺跡
8 柚比本村遺跡　9 永田古墳群　10 本川原遺跡　11 本原遺跡　12 田代代官所跡　13 加藤田遺跡　14 日岸田遺跡　15 東十郎古墳群　16 京町遺跡　17 小原遺跡　18 西浦遺跡　19 藤木遺跡　20 今泉遺跡　21 古賀遺跡　22 元古賀遺跡　23 都谷遺跡
24 宮西遺跡　25 牛原原田遺跡　26 牛原前田遺跡　27 養父遺跡　28 蔵上遺跡　29 内精遺跡　30 原古賀遺跡　31 山浦古墳群
32 本村遺跡　33 山浦西北方遺跡　34 西田遺跡　35 一の坪遺跡　36 薄尾古墳群　37 幸津遺跡　38 霞堤　39 三本松遺跡
40 本行遺跡　41 所熊山古墳群　42 立石遺跡　43 山田遺跡　44 惣楽遺跡　45 柳の元遺跡　46 笛吹山古墳群

図３　鳥栖市内の主な遺跡の分布（1/60,000）　国土地理院発行の５万分の１地形図（脊振山・甘木）を使用

濠が確認されている。墳墓としては、柚比遺跡群などで甕棺墓地が終焉するとともに、土坑墓などに変遷し、藤木遺跡では石蓋土坑墓から内行花文鏡が出土している。

古墳時代前・中期は、集落として元古賀遺跡・牛原前田遺跡・養父遺跡などがあり、墳墓として赤坂前方後方墳や平原古墳、本川原遺跡・日岸田遺跡・今泉遺跡などで方形周溝墓、山浦古墳群・薄尾古墳群・所熊山古墳群で竪穴式系石室などが確認されているが、調査例が少なく不明な点が多い。

ところが、古墳時代後期になると様相は一変し、遺跡の内容・密度とも高くなり、調査例も数多い。集落としては、柚比遺跡群（平原・大久保遺跡など）・牛原前田遺跡・蔵上遺跡・内精遺跡などで大規模な集落が営まれるようになる。墳墓としては、前方後円墳である剣塚古墳・岡寺古墳・庚申堂塚古墳・牛原原田遺跡ST05古墳、装飾古墳として有名な田代太田古墳や牛原原田遺跡ST06古墳などの大型円墳、ヒャーガンサン古墳（装飾古墳）・梅坂古墳・稲塚古墳などの径20～30mの中型円墳、主に山麓部に展開する永田古墳群・東十郎古墳群・都谷遺跡・宮西遺跡・牛原前田遺跡・山田遺跡・惣楽遺跡などの群集墳があり、墳墓の階層性が明確である。

律令制下の鳥栖市域は肥前国の東端にあたり、おおよそ大木川を境に北東部が基山町域と合わせて基肄郡、南西部が養父郡となる。基肄郡は、『肥前風土記』に「郷陸（六）所、里十七、驛壱所小路」とあり、大宰府防衛の一環としての朝鮮式山城である基肄城が基山町と福岡県筑紫野市にまたがって築かれている。基肄郡家や駅の位置については確定していないが、八ツ並金丸遺跡・大久保遺跡では奈良時代の官衙的な掘立柱建物群が確認されている。また、大木川周辺には古代官道である西海道肥前路が地割の直線的痕跡として昭和22年の空中写真などで確認できる。

養父郡は、『肥前風土記』に「郷肆（四）所、里一十二、烽壱所」とあり、鳥樔・曰理・狭山の３郷が記されているが、『和名類聚抄』には狭山・屋田・養父・鳥栖の４郷が記載されており、郡名と郷名が重複することから、『肥前風土記』では養父郷が省略された可能性がある。烽は、日限山という別名がある朝日山に比定されている。養父郡家は主に歴史地理学的な方法により蔵上地区が有力視されていたが、蔵上遺跡の発掘調査で奈良時代の掘立柱建物や竪穴住居などが確認され、「厨番」と記された墨書土器などが出土していることから、郡家に関連する遺跡であると考えられる。政庁などは確認されていないが、古くからの蔵上集落内が郡家の中心で、調査された区域は周辺施設であることが推定されている。

飛鳥～平安時代前半期の集落としては、基肄郡域では柚比遺跡群（三ヶ敷梅坂・柚比梅坂・大久保北・今町梅坂・荻野遺跡）・本川原遺跡・本原遺跡・加藤田遺跡・日岸田遺跡など、養父郡域では元古賀遺跡・牛原前田遺跡・立石遺跡・惣楽遺跡・柳の元遺跡などがあり、一時的に断絶する場合もあるが、古墳時代後期から継続している例が多い。その中にあって、惣楽遺跡は平安時代前期にのみ営まれる集落で、四面廂の建物が検出され、緑釉陶器皿や転用硯などが出土していることから官的な性格の集落の可能性がある。墳墓としては、火葬墓と考えられる遺構が永田古墳群・柚比本村遺跡・東十郎古墳群・宮西遺跡・笛吹山古墳群などで確認され、蔵骨器とみられる壺が平原遺跡・麓刑務所内などで出土している。また、牛原前田遺跡では10世紀代の礫槨木棺墓が確認されている。

平安時代後半期以降、律令体制の弱体化とともに鳥栖市域でも荘園が増加するようであるが、荘園の

成立や経営については不明な点が多い。「太宰府天満宮安楽寺草創日記」には永承２（1047）年に神辺荘50町が、永保３（1083）年に鳥栖荘・幸津荘・幸津新荘など合わせて約231町が安楽寺に寄進されていたことがみえる。鎌倉時代後期の史料であるが、正応５（1292）年８月16日「河上宮造営用途支配惣田数注文」（河上神社文書）には、大宰府安楽寺領として鳥栖荘45丁２反・幸津荘50丁２反・幸津新荘55丁・神辺荘80丁,宇佐八幡宮弥勒寺領として養父荘27丁・村田荘127丁、他の荘園として荒保社領19丁５反・東屋社領３丁３反、公田分として基肄北郷157丁８反３丈・基肄南郷327丁３反３丈・養父東郷232丁２反・養父西郷193丁６反・義得保70丁・瓜生野保79丁４丈などがみえる。鳥栖市域の在地領主としては、関東から派遣された御家人と考えられている曽禰崎氏や綾部氏の一族である藤木氏・土々呂木氏などが文献にみられる。

中世前期の集落としては、区画溝で囲まれた屋敷地が確認された今泉遺跡や、柚比遺跡群（前田・田代公園・柚比本村・柚比梅坂遺跡）・日岸田遺跡・古賀遺跡・牛原前田遺跡・養父遺跡・本村遺跡・一の坪遺跡・三本松遺跡などがあり、田代公園遺跡では11世紀頃の滑石製石鍋とともに初期高麗青磁椀が出土している。この時期の墳墓としては、八ツ並金丸遺跡・柚比本村遺跡・田代公園遺跡・今泉遺跡・本行遺跡などで輸入陶磁器を副葬した土坑墓・木棺墓が、牛原前田遺跡では中国陶器を蔵骨器に用いた火葬墓などが確認されている。

南北朝期になると、鳥栖市域を含む東肥前地域は九州探題・南朝方の菊池氏・足利直冬の三つ巴の勢力争いなど戦乱の場となり、南北朝統一後も国人層に担がれる少弐氏と防長地域の有力守護大名大内氏の支援を受ける九州探題渋川氏の対立を軸にして戦乱が絶えなかった。この時期の鳥栖市域の在地領主としては藤木氏・山浦氏・原口氏・神辺氏などが文献に散見されるが、戦国期には少弐氏一族である筑紫氏が勝尾城を本拠にして勢力を伸ばしている。勝尾城と筑紫氏については別に項を設ける。

中世後期の集落として、京町遺跡・小原遺跡・西浦遺跡では建物などの内部の詳細は不明であるが、区画溝をもつ屋敷地が確認されており、西浦遺跡では朝鮮産の粉青沙器四耳壺が溝に埋納されるような形で検出されている。藤木遺跡でも区画溝と考えられる溝が多数検出され、建物などは確認されていないが、瓦の出土から瓦葺建物の存在が推定される。地名からすると、藤木氏に関連する屋敷地などの可能性が考えられる。この他に当時期の遺跡として、本村遺跡・原古賀遺跡などがある。

柚比本村遺跡ではこの時期の城郭遺構が調査され、曲輪・竪堀・堀切・土塁などが確認されており、出土遺物には在地系土器（杯・小皿・鍋・擂鉢・茶釜など）・中国陶磁・朝鮮陶磁・国産陶器などがあり、14世紀後半～16世紀前半に盛期がある。周辺の山城の状況と総合して、14世紀後半は陣所、15世紀代は拠点的城館、16世紀後半は「陣城」として利用されていたことが推測されている。文献には毛利元春軍忠状案（毛利家文書）や長井貞廣軍忠状写（萩藩閥閲録所収文書）に応安６（1373）年今川了俊率いる北朝方が陣取った「由比」御陣がみられ、一帯の城郭遺構に該当する可能性が高い。

天正15（1587）年豊臣秀吉の九州平定によって、基肄郡と養父郡東半は小早川隆景に与えられ、のち豊臣家直轄領を経て慶長４（1599）年に対馬藩領となり、養父郡西半は鍋島直茂に与えられ、佐賀藩領となり、明治維新までこの区分けが続くことになる。江戸時代になると長崎街道が整備され、対馬藩田

代領には田代宿、佐賀藩領には轟木宿が置かれた。田代領には領内支配の拠点として田代宿に代官所が設置され、代官が常駐した。また、江戸時代後期には配置売薬業が興り、盛んとなる。長崎街道で佐賀藩の境界にあたる轟木宿には御番所（関所）や御茶屋（藩主の宿泊施設）が設けられ、出入国管理の拠点となっていた。また、村田町には貞享元（1684）年に創立された親類四家の一つである村田鍋島家の本拠が置かれ、村田家の屋敷を中心に町屋が形成されていた。江戸時代の農地開発・水利事業として、佐賀藩領には幸津井樋を始めとする安良川の水利事業や灌漑用溜池である五反三歩の池、市外ではあるが筑後川の大規模な堤防である三養基郡みやき町千栗土井などがみられ、江戸時代初期の成富兵庫茂安による事業とされている。

市内での近世遺跡の調査は断片的であるが、安良川の堤防である霞堤の調査が行なわれ、江戸期の土木工事の一端をうかがい知ることができる。また、田代代官所跡が調査され、厠跡・整地層などが確認され、多量の陶磁器・瓦が出土している。

3　勝尾城

勝尾城に関しては、応永30（1423）年に九州探題渋川義俊が居城とした（北肥戦誌・歴代鎮西要略）とされるが、当該期における一次資料が少なく、築城主体や使用時期などは不明な点が多い。これに対して、筑紫氏が豊臣政権によって筑後に移封される天正15（1587）年までの使用下限が認められ、九州における戦国城下町の成立過程や戦国国衆である筑紫氏の支配体制の実態を探る上で重要な遺跡として、平成18年１月に勝尾城・筑紫氏館跡・周辺の山城群・城下町推定地一帯の約138haが、勝尾城筑紫氏遺跡として史跡に指定されている。遺跡は、主要空間である谷の最奥部に筑紫氏館・屋敷地・寺院・門跡などの伝承地が点在し、谷部を取り囲むように山城群が配置される中世の典型的な拠点形態の様相をうかがわせるが、城域内に家臣館と推定される「ハルカド」「トモキヨ」や町屋を連想させる「シンマチ」などの地名が残ることから、家臣・商人を集住させ、経済機能や集権体制を城域内部に組込んだ中世拠点集落であった可能性が高いとされる。

戦国期に勝尾城を所有した筑紫氏を歴史上で確認できる所見は、応永７（1400）年の少弐貞頼が筑紫次郎にあてた知行充行状である。少弐武藤氏の中心的な地位にあった筑紫氏だが、明応７（1498）年の「河上神社文書」には、大内氏の庇護の下、佐賀郡代として筑紫満門が河上宮の造営を取り仕切っていることが記されており、明応年間か、少なくとも満門期には少弐武藤氏のもとを離れ、肥前東部における地位を確立しつつあったと考えられる。また、筑紫氏が勝尾城に入城した時期は、渋川氏勢力を一掃した長享元（1487）年以降と考えられるが、北部九州の社会情勢が激変するなか、筑紫氏は勝尾城から本拠を移した時期もみられ、戦国期に至るまで恒久的に勝尾城を本拠として使用していたわけではないようである。

平成11～16年度にかけて鳥栖市教育委員会によって行われた勝尾城筑紫氏遺跡の確認調査では、筑紫氏館跡を始め、全慶寺跡や武家屋敷跡の伝承地、勝尾城や葛籠城などの山城群から、15～16世紀後半の中国陶磁・朝鮮陶磁・国産陶磁・在地系土器（杯・小皿・鍋・擂鉢など）・瓦類・硯・飾り金具など豊富

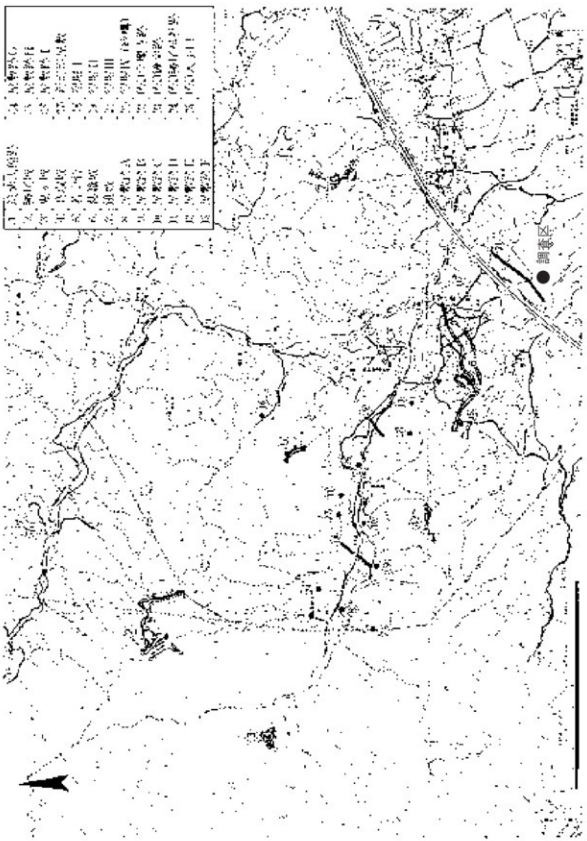


図4　勝尾城下町遺跡全体図（1/18,000）　鳥栖市教育委員会『勝尾城筑紫氏遺跡』から転載、加筆・修正

な遺物が出土している。この発掘調査で、谷内部一帯に筑紫氏の関連施設が展開していたことが判明し、筑紫氏館跡や総構え空堀に隣接する山浦新町遺跡では天正14（1586）年の島津軍侵攻の痕跡と推定される炭化層や焼土層（焼けた土壁）が検出されるなど[注1]、大きな調査成果を得ている。谷内部における各施設の遺物組成は類似する傾向にあるが、筑紫氏館跡では儀礼祭祀を示す一定量の土師器杯・小皿や大量の瓦類[注2]が集中して出土しており、他施設より多様な空間構成が推定される。筑紫氏館跡での瓦の出土や谷奥部に残る「瓦門」伝承地から瓦葺建物の存在は間違いないが、現在のところ瓦の出土は勝尾城と筑紫氏館跡でしか認められず、集権化・階層性に準ずるものか今後検討を要する。しかし、筑紫氏館跡の石垣虎口、勝尾城内で確認できる雛壇石垣[注3]や喰い違い虎口・桝形虎口などの防御施設は、九州でもトップクラスの築城技術と評価できるものであり、筑紫氏が主要空間である筑紫氏館跡と勝尾城のみに先進的な技術・文化を集中させることができる集権的な支配体制を組織していたことを裏付けるものである。

15世紀からの使用が推測される勝尾城では、主郭東に堀切を埋没させて曲輪を造成した痕跡が確認でき、何度か城内改修を行っていることは疑う余地がない。北西部にみられる畝状空堀群や副郭の南側に張り出す櫓台などの防御施設は、北部九州において16世紀後半頃からみられ、城内の雛壇石垣や桝形虎口などの先進技術の導入も絡めた城内大改修が16世紀後半に行われたと考えられる。勝尾城の他に、鏡城や葛籠城などでも16世紀後半の改修を示す防御施設が確認でき、16世紀後半に谷部を遮断する長塁ラインを含めた城下全体の再整備が行われたと推定される。

史跡勝尾城筑紫氏遺跡として知名度が上がっていくなか、勝尾城や葛籠城などの山城部分の縄張り研究は一定の成果をあげているが、谷を遮断する長塁ラインの意味や屋敷地の階層性の有無など、谷内部の構造や性格は未だ不透明な点が多い。特に町屋については、町屋推定地である山浦新町遺跡（⑪新町町屋敷）の発掘事例があるが、各地の中近世城下町で確認される短冊型地割や町職種を限定できる考古資料は未だ確認されておらず、実態把握のためにも新たな発掘調査成果が期待される。

注

1）当該期の史料として、島津軍の武将上井覚兼によって記された『上井覚兼日記』には、「去六日、筑紫麓下栫下残破却候、上城之事一両日中程有間敷」とある。また、近世に成立した『北肥戦誌』に記される天正14年の島津方の動向には、「筑紫の居城勝尾・山浦を攻むべしと瓜生野口より取り懸る。中にも伊集院肥前守・河上左京進、伏兵を以て夜中より打出で、勝尾の城の麓新町輒く焼払ふ。夫より諸勢相續いて、廣門の居館を初め、小路々々其外所々の塹垣打崩し、残る所なく放火し」とある。史料からは、麓（城下？）または新町に何かしらの施設が存在したこと、城内が徹底的に破壊され、火が放たれたことがうかがえる。

2）筑紫氏館跡で出土した瓦は、燻し加工が不十分で、黄橙色の瓦片もみられる。瓦当面の文様は宝珠と唐草文様で構成され、丸瓦の切り離し技法はコビキA主体である。北部九州の山城での瓦の出土は、福岡県糸島郡二丈町二丈岳城、前原市高祖城、甘木市古処山城・福岡市安楽平城、佐賀県武雄市住吉城、白石町須古城などで確認される。

3）雛壇石垣は勝尾城の他、佐賀県鹿島市山浦城、白石町須古城、長崎県佐世保市武辺城などで確認できる。石を直積みするため、一定の高さまでしか石を積めず、後方にずらして再度石を積むという構築形態の石垣で、中世の石垣技術の限界を示す。

第２章　参考・引用文献

小田富士雄（1959）「佐賀県鳥栖市田代発見の石剣と土器」『九州考古学』第７・８集　九州考古学会
小田富士雄・下原　幸裕（2003）「佐賀県・東十郎古墳群の研究」『福岡大学考古学研究室調査報告第２冊』
福岡大学考古学研究室
片山　安夫（2000）「北部九州の在地性城郭瓦について」『北部九州中近世城郭研究会大会資料』
佐賀県教育委員会（1966）『東十郎古墳群』
佐賀県教育委員会（1973）『鳥栖市山浦古墳群』佐賀県文化財調査報告書第21集
佐賀県教育委員会（1974）『本川原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第26集
佐賀県教育委員会（1975）『本川原遺跡一第２次調査―』佐賀県文化財調査報告書第32集
佐賀県教育委員会（1979）『本川原遺跡一第３次調査―』佐賀県文化財調査報告書第49集
佐賀県教育委員会（1991）『都谷遺跡』佐賀県文化財調査報告書第104集
佐賀県教育委員会（1993）『平原遺跡１』佐賀県文化財調査報告書第119集
佐賀県教育委員会（1993）『平原遺跡２』佐賀県文化財調査報告書第120集
佐賀県教育委員会（1993）『大久保遺跡Ⅱ』佐賀県文化財調査報告書第137集
佐賀県教育委員会（1997）『佐賀県の地質鉱物』佐賀県文化財調査報告書第134集
佐賀県教育委員会（2001）『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集
佐賀県教育委員会（2002）『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集
佐賀県教育委員会（2003）『柚比遺跡群３』佐賀県文化財調査報告書第155集
佐賀県教育委員会（2003）『柚比遺跡群４』佐賀県文化財調査報告書第158集
佐賀県教育委員会（2007）『幸津遺跡』佐賀県文化財調査報告書第169集
佐賀県立博物館（1978）『庚申堂塚調査報告書』佐賀県立博物館調査研究報告書第４集
高尾　平良（1998）「勝尾城を支えた鳥栖地方の集落と町屋」『戦国の城と城下町Ⅱ』鳥栖市教育委員会
鳥栖市誌編纂委員会(2005)『鳥栖市誌　第１巻　自然地理編』鳥栖市
鳥栖市誌編纂委員会(2005)『鳥栖市誌　第２巻　原始・古代編』鳥栖市
鳥栖市教育委員会（1976）『田代太田古墳調査及び保存工事報告書』鳥栖市文化財調査報告書第１集
鳥栖市教育委員会（1978）『古賀遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第２集
鳥栖市教育委員会（1979）『柚比遺跡群範囲確認調査第２年次概要報告書―梅坂炭化米遺跡・平原古墳・平原遺跡の調査―』鳥栖市文化財調査報告書第４集
鳥栖市教育委員会（1979）『長ノ原遺跡調査概報』鳥栖市文化財調査報告書第５集
鳥栖市教育委員会（1981）『小原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第９集
鳥栖市教育委員会（1982）『梅坂炭化米遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第10集
鳥栖市教育委員会（1982）『平原遺跡・平原古墳』鳥栖市文化財調査報告書第11集
鳥栖市教育委員会（1983）『村田・三本松遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第17集
鳥栖市教育委員会（1979）『柚比遺跡群範囲確認調査第６年次概要報告書―柚比梅坂遺跡の調査―』鳥栖市文化財調査報告書第18集
鳥栖市教育委員会（1984）『フケ遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第20集
鳥栖市教育委員会（1984）『岡寺前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第21集
鳥栖市教育委員会（1984）『剣塚前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集
鳥栖市教育委員会（1985）『鳥栖市団体営圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』鳥栖市文化財調査報告書第24集
鳥栖市教育委員会（1985）『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第25集

鳥栖市教育委員会（1988）『本原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第36集
鳥栖市教育委員会（1990）『一の坪遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第41集
鳥栖市教育委員会（1994）『牛原原田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第43集
鳥栖市教育委員会（1995）『惣楽遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第44集
鳥栖市教育委員会（1996）『柳の元遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第45集
鳥栖市教育委員会（1996）『山浦新町遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第46集
鳥栖市教育委員会（1996）『牛原前田遺跡Ⅰ』鳥栖市文化財調査報告書第47集
鳥栖市教育委員会（1996）『牛原前田遺跡Ⅱ』鳥栖市文化財調査報告書第48集
鳥栖市教育委員会（1997）『本行遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第51集
鳥栖市教育委員会（1997）『養父遺跡・四の坪遺跡・本村遺跡・原古賀遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第52集
鳥栖市教育委員会（1997）『立石地区遺跡群』鳥栖市文化財調査報告書第53集
鳥栖市教育委員会（1997）『京町遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第54集
鳥栖市教育委員会（1997）『今泉遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第55集
鳥栖市教育委員会（1998）『西田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第56集
鳥栖市教育委員会（1999）『勝尾城下町遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第57集
鳥栖市教育委員会（2000）『蔵上遺跡Ⅰ』鳥栖市文化財調査報告書第58集
鳥栖市教育委員会（2000）『内精遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第59集
鳥栖市教育委員会（2000）『蔵上遺跡Ⅱ』鳥栖市文化財調査報告書第60集
鳥栖市教育委員会（2000）『蔵上遺跡Ⅲ』鳥栖市文化財調査報告書第61集
鳥栖市教育委員会（2001）『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第62集
鳥栖市教育委員会（2001）『長ノ原遺跡・神山遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第63集
鳥栖市教育委員会（2001）『加藤田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第64集
鳥栖市教育委員会（2001）『長ノ原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第65集
鳥栖市教育委員会（2001）『永田古墳群』鳥栖市文化財調査報告書第66集
鳥栖市教育委員会（2001）『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第67集
鳥栖市教育委員会（2002）『藤木遺跡・今泉遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第68集
鳥栖市教育委員会（2002）『所熊山古墳群』鳥栖市文化財調査報告書第69集
鳥栖市教育委員会（2003）『フケ遺跡・神山遺跡・内畑遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第70集
鳥栖市教育委員会（2004）『西浦遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第71集
鳥栖市教育委員会（2004）『戦国勝尾城下町―甦る戦国の城下町』鳥栖市市制50周年記念事業
鳥栖市教育委員会（2005）『幸津霞堤』鳥栖市文化財調査報告書第75集
鳥栖市教育委員会（2005）『八ツ並金丸遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第76集
鳥栖市教育委員会（2006）『今泉遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第77集
鳥栖市教育委員会（2006）『勝尾城筑紫氏遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第78集
鳥栖市教育委員会（2006）『九州戦国史　勝尾城下町―よみがえる戦国地代』鳥栖市勝尾城筑紫氏遺跡国史跡指定記念
中村　修身（1994）「豊前における中世末期城郭の瓦について」『織豊城郭創刊号』織豊期城郭研究会
堀本　一繁（2007）「筑紫氏・勝尾城」『海路５～中世の城郭と城下町～』海鳥社
松尾　禎作（1954）「東肥前出土奈良時代乃至平安初期の蔵骨器について」『佐賀県文化財調査報告書』第三輯
佐賀県教育委員会

第３章　調査の記録

１　概要

勝尾城下町遺跡は鳥栖市山浦町・牛原町・河内町に所在し、勝尾城・筑紫氏館跡・葛籠城など主要部分が「勝尾城筑紫氏遺跡」の名称で史跡に指定されている。今回の調査区は山浦町字中原の範囲にあり、遺跡の南端部分に当たる。

調査区は、九千部山系からおおよそ南東に延びる標高55～70ｍの舌状台地上から斜面地に位置し、東に鳥栖市街地を一望できる立地環境にある。調査区の北西約400ｍには葛籠城、北約200ｍには勝尾城の木戸跡や町屋跡と推定される建物群を検出した山浦新町遺跡などが立地し、平成15年度に行われた変電所予定地の確認調査では、総構え空堀や竪堀などが検出されている。また、北側水田部には「ジンションバル（陣所の原か？）」や「カマノホカ（構の外か？）」などの中世の筑紫氏などに関係すると推定される地名が残っている。

今回の調査では、変電所予定地内の大規模な削平を受けている部分を除き、丘陵北側の斜面部を１区、１区西側を２区、丘陵南側の斜面部から東側を３区として調査を行った。

１区では石垣２条、石列１条、不明遺構１基を検出した。石垣と石列は同一時期に築かれたと考えられるが、明確な時期は不明である。

２区では工事用仮設道路敷設による総構え空堀に対する影響の有無を確認するために調査を行い、上部を削平された空堀跡を約30ｍ検出した。

３区では確認調査で竪堀が検出されており、他の山城遺構を確認するため、竪堀状の地形や小さな平坦地、堀の可能性がある里道を中心にトレンチを設定し、遺構が確認されたトレンチについては拡張して調査を行った。調査の結果、縄文時代の遺物包含層と奈良・平安時代の火葬墓、時期不明の土坑などを確認した。

調査区東側の３A区で確認した縄文時代の遺物包含層からは、少量ではあるが早期の平椎式土器や黒曜石製石鏃などが出土した。

３A区で確認した奈良・平安時代の火葬墓３基は、墓坑に炭化物を充填し、その上に蔵骨器を埋置する形態である。SP13火葬墓の蔵骨器には専用に製作されたと考えられる土師器無頸壺が使用されている。周辺の削平が著しいため、墓地全体の状況は把握できないが、古代の埋葬習俗を知る上で貴重な資料である。

南斜面では竪堀や時期不明の焼土遺構などが確認されるが、遺構・遺物とも希薄である。しかし、少量であるが戦国期の青磁椀・青花皿などが出土しており、削平された丘陵頂部を中心に山城が展開した可能性が指摘できる。

図５　調査区周辺の地形、調査区の位置(1/1,500)

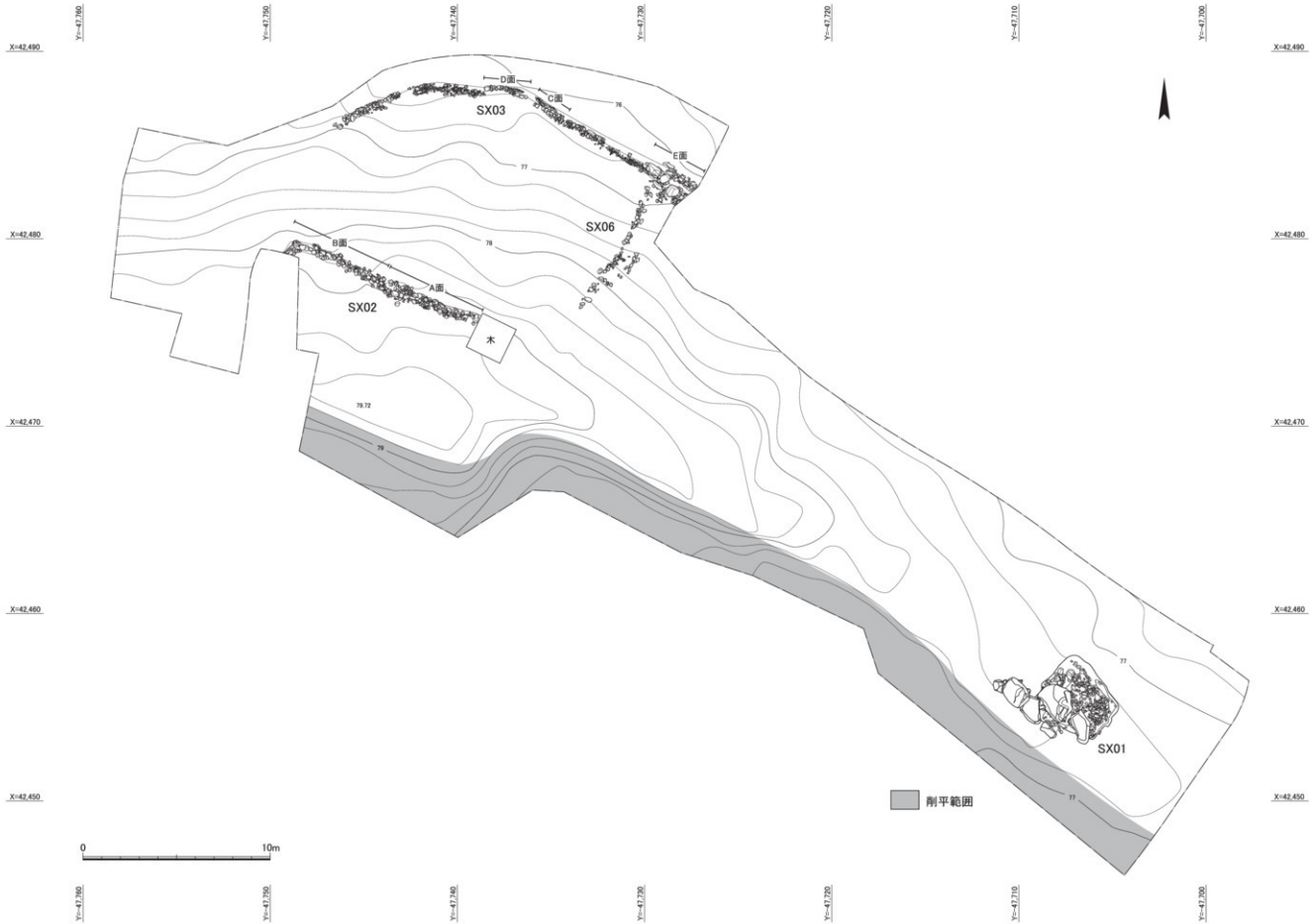


図6　1区の遺構分布(1/200)

２　１区の遺構

１区では、東側の平坦地でSX01不明遺構、西側の斜面部でSX02・03石垣とSX06石列を確認した。検出された石垣や石列は一部破壊されており、石垣の前面には築石と考えられる石材が散在する状況であり、１区は石垣や石列などが一部破壊・削平された後、昭和30年代の土取り工事関係の造成土と考えられる赤褐色土で埋没することが判明した。また、赤褐色土下層の黄褐色粘質土から、須恵器杯蓋や壺が出土したが、いずれの遺構も明確な時期を限定することはできなかった。

SX01不明遺構（図７）

１区の東端に位置する。調査前から周辺には１～２ｍ大の岩が露頭しており、当初墳丘と羨道部が破壊された古墳の石室と考えていたが、明確な床面を確認できず、袖石や腰石の痕跡もみられないことから不明遺構とした。露頭する岩の下方からは、長軸3.8m、短軸3.2m、深さ0.3～0.6mの平面方形の土坑が検出された。土坑内には、上層に径0.2～0.4mの花崗岩の礫を含む黒褐色土が0.4mほど堆積し、黒褐色土の下層には、赤褐色土と青灰色土が混じった土がみられる。上層の黒褐色土から縄文土器や須恵器が出土したが、SX01の時期を示すものかは不明である。

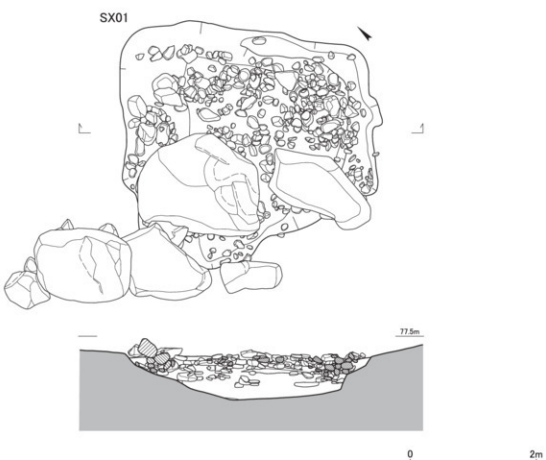


図７　SX01(1/60)

SX02石垣（図８）

１区の西側に位置する。石垣は「野面積み」で、面取りを意識させる石材が全体の半数を占める。調査区内において最も高い地点に位置し、等高線に沿って東西方向に約11ｍ検出できた。SX02の西端は120°の鈍角で南西方向に曲がるが、その延長部で石垣を検出することはできなかった。築石は0.4～1.2ｍの石材で３～４段積まれ、状態の良い地点の高さは約１ｍである。しかし、SX02の前面には大量の石材が落ち込んでいて、石垣全体に覆いかぶさっていた状況を考えると、石垣の上部が破壊されている可能性が高い。隅角を含むB面付近では、比較的大きな石材が用いられている。

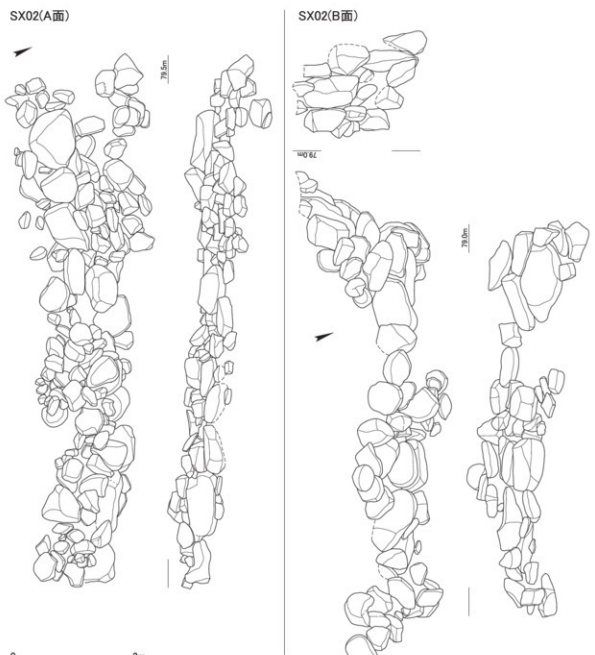


図８　SX02(1/60)

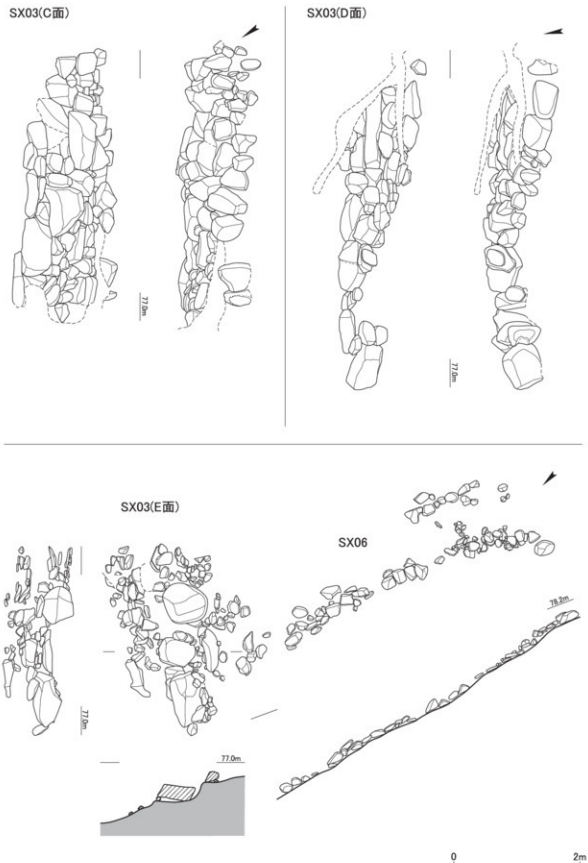


図9　SX03・06（1/60）

SX03石垣（図９）

１区の北側に位置し、SX02から約12m北側に築かれ、その高低差は約２ｍである。SX02と同じく「野面積み」の石垣で、東西方向に約20m検出できた。明確な隅角は確認できないが、２ヶ所で軸が変化する。築石は0.４～0.８mの石材の使用が多く、SX02より規格性があり、0.２m大の裏込め石も確認される。また、SX02と比較して前面の石の落ち込みが少なく、状態の良い地点の高さは約1.４mである。SX03の東端部（E面）では階段状に石が積まれており、地山を段々に掘削し、石材を安定させるための石を下に詰め、その上に扁平な石が置かれている。階段部の袖石はいずれも内側に面取り加工が施されている。

SX06石列（図９）

SX02とSX03の間に位置し、SX03東端から南西に延びる石列である。SX03東端の階段状に積まれた入口から南西方向に抜ける道と考えられる。SX02・03・06の地山は北に傾斜する斜面であり、SX06も北と南では１ｍほどの高低差がある。

３　２区の遺構

２区では、丘陵頂部に当たるもっとも広いトレンチが全体に大きく削平を受けていたため、検出できた遺構はSD04堀のみである。

SD04堀（図10）

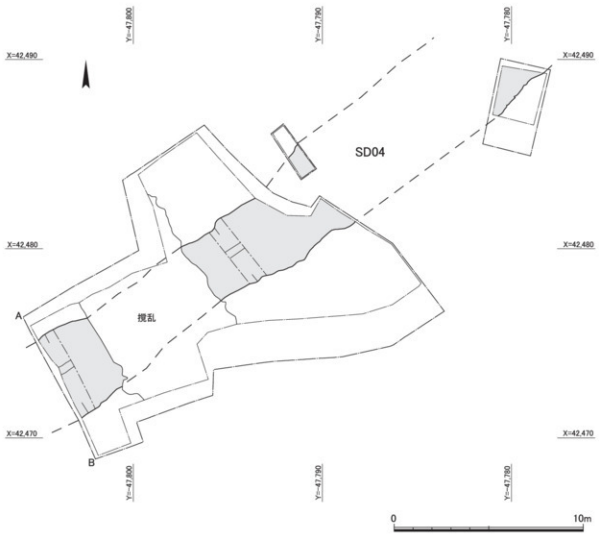
SD04は勝尾城の総構え空堀と呼ばれているもので、削平されているにも係わらず、幅5.４m、深さ2.８～3.０mに及ぶ。SD04下部は岩盤を掘り込み、底付近で狭く造形されるが、削平のため土塁の有無は確認できなかった。２区の大部分は花崗岩の岩盤まで削平されているが、東側の二つのトレンチでは岩盤より上層の黄褐色土の地山が検出され、確認できる幅から大規模な堀であったことが示唆される。

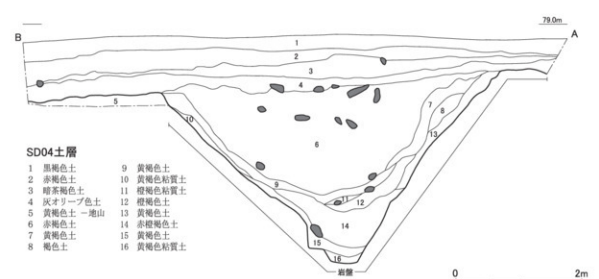
土層観察の結果、６層（１区の造成土と同一）で埋められた後、６層ごと削平され、１～４層などの廃材や客土で埋没したと考えられる。５層は花崗岩の岩盤より上位の層として考えられ、東側のトレンチで確認できた地山と同一である。７層以下は、堀が掘削されてから６層で埋められるまでの自然堆積と推定され、中世における人為的な破却の痕跡は認められない。

今回の調査では土塁の存在を確認できなかったが、延長部にあたる南斜面の竪堀や調査区北側の段丘斜面部に現存する総構え空堀の両脇には土塁が確認でき、当時は土塁を備えていたと推定される。

４　３区の遺構と遺物

３区東部は丘陵上で、18～29トレンチでは削平された後に廃材や瓦礫が堆積しており、遺構・遺物は確認されていないが、削平を受けずに遺物包含層が確認されたトレンチを拡張し、３A区（図11）として調査を行った。その結果、縄文時代の遺物包含層、奈良・平安時代の火葬墓３基、時期不明の土坑９基を検出した。３A区は南に下がる緩斜面で、３A区北側のA点と南側のC点では約1.５mの高低差がある。





SD04土層

1	黒褐色土	9	黄褐色土
2	赤褐色土	10	黄褐色粘質土
3	暗茶褐色土	11	橙褐色粘質土
4	炭オリーブ色土	12	橙褐色土
5	黄褐色土 ～地山	13	黄褐色土
6	赤褐色土	14	赤橙褐色土
7	黄褐色土	15	黄褐色土
8	褐色土	16	黄褐色粘質土

図10　２区の遺構分布（1/200）、SD04の土層（1/60）

厚さ0.2～0.7m確認される遺物包含層（黄色粘質土）は３A区北側に広がりをみせるが、南側では部分的にしか確認できなかった。また、土坑９基はいずれも埋土に地山土が層として入り込んでいる状況が確認されるが、人為的な掘り込みかどうかは不明であり、SK11のみ遺構図を掲載した。遺物もSK17底面直上から平椎式土器と推定される細片が出土したのみである。

３区南斜面では竪堀１条（SD05）が平成15年度確認調査で検出されているが、踏査段階から竪堀状の地形や小さな平坦地がみられ、山城の関連遺構を確認するため、トレンチを設定して調査を行った。その結果、地表面観察でみられた変化は山城の遺構ではないと判断したが、１・２・７トレンチでは縄文時代～中世の遺物を含む黄褐色粘質土（11層）を確認した。11層は１区で確認された層と同一である可能性が高く、丘陵頂部から押し出された２次堆積層と考えられる。また、南斜面に設定した大部分のト

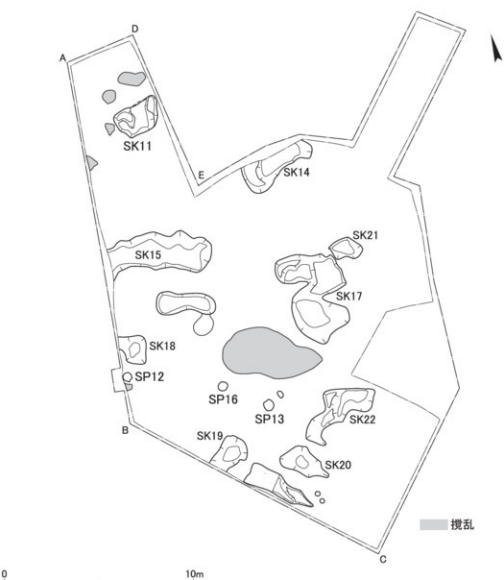


図11　３A区の遺構分布（1/200）

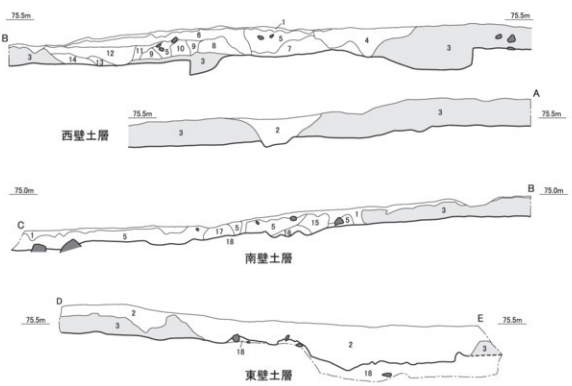
レンチで１区にみられる赤褐色土の造成土も確認され、現況の南斜面の地形は大幅に南方向に押し出されていることがわかった。遺物としては縄文時代の石器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器などが出土した。

南斜面のトレンチのうち、３区中央に位置するAトレンチの遺物出土量がやや多かったため、拡張して調査を行い、３B区（図16）とした。この周辺は傾斜が緩やかで、平場状となっており、SD05と隣接する。調査の結果、SX10焼土遺構と小穴４基を確認し、縄文時代～中世の遺物（石鏃・石匙・弥生土器壺・須恵器杯蓋・土師器鍋・青磁椀・青花皿など）が出土した。

また、堀を再利用した可能性がある里道について、トレンチを設定して調査を行った。

SP12火葬墓（図14）

３A区の南西に位置する。掘削機による表土除去中に検出したため、一部上部構造が確認できなかった。墓坑の平面は径0.4～0.5mの不整円形で、深さ0.1～0.15mである。墓坑下部には１cm角の炭化物や土器片を含む黒茶褐色粘質土（２層）が敷かれ、その上に蔵骨器が据えられていた。蔵骨器の内部には火葬



1 表土
2 攪乱
3 黄色粘質土 －縄文時代包含層
4 茶褐色土（２～５mmの炭化物を含む）
5 赤褐色土（５～10cmの礫を含む）
6 黄色土
7 赤褐色土
8 赤褐色土（２～５mmの炭化物を含む）
9 赤褐色粘質土
10 赤褐色土
11 黄褐色粘質土
12 黄茶褐色粘質土
13 赤褐色粘質土
14 赤褐色土
15 黄褐色粘質土＋茶褐色土
16 黄褐色粘質土
17 茶褐色土（２～５mmの炭化物を含む）
18 赤褐色土 －地山

図12　３A区の土層（1/80）

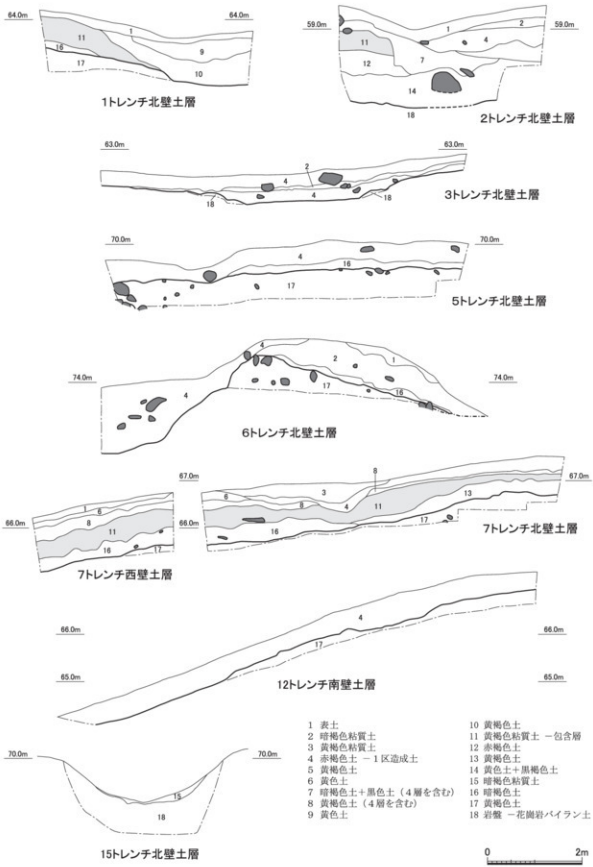


図13　3区トレンチの土層（1/80）

骨が厚さ５～10cm程度層を成し、土層図中の１層は検出作業中に入り込んだ地山土であることから、調査以前には埋葬時点での状態が保存されており、壺の上には蓋が被っていたと推定される。火葬骨は頭蓋骨・四肢骨などが確認される。

１・２はともに転用品である。１は須恵器蓋で、口径20.1cm、器高3.2cm、口縁端部は玉縁状である。天井部はヘラ切り後ナデで、板と思われる圧痕がみられる。８世紀後半～９世紀初頭の時期と考えられる。２は須恵器壺で、口縁部を打ち欠いた状態で器高22.9cmである。外面・内面上半はヨコナデ、内面下半はナデで、外面下半は摩耗のため調整不明である。

SP16火葬墓（図14）

３A区の南西部、SP12の東に位置する。墓坑の平面は径0.48mの円形で、深さ0.15～0.2mである。検出状況から蓋は埋葬時点から存在しなかった可能性があり、土の入り込んだ蔵骨器内部には火葬骨がほとんど残存しておらず、四肢骨がわずかに確認されるのみである。墓坑下層にはSP12と同様に炭化物や土器片を含む黒茶褐色土が敷かれているが、SP12で確認できなかった墓坑上層は茶褐色粘質土で埋められている。

３は須恵器短頸壺で、転用品である。口縁部を打ち欠いた状態で器高15.9cmである。内面は同心円文あて具痕、外面は格子目タタキ後カキ目、頸部内外面はヨコナデが施される。外面には別個体の破片が溶着している。

SP13火葬墓（図15）

３A区の南部、SP16の東に位置する。墓坑の平面は径0.56mの不整円形で、深さ0.1～0.15mである。他の二つの火葬墓と比較して墓坑下部に充填された炭化物の割合が異常に高いことが特徴として挙げられる。墓坑上部はSP16と同じように茶褐色粘質土で埋められている。蔵骨器は墓坑の中心から西にずらして埋置され、墓坑東側には蔵骨器の底部付近の高さから鉄製品が出土している。

蔵骨器内部は上部に空洞が確認できるなど、非常に良好な状態で残っていた。火葬骨は３基の火葬墓のなかで一番量が多く、頭蓋骨・下顎骨・歯・肩甲骨・四肢骨・膝蓋骨などが確認される。また、蔵骨器内にはコメと推定される炭化物や繊維状の遺物も混入していた（写真図版13）。

４はほぼ完形の土師器蓋で、口径15.8cm、器高3.3cmである。天井部はヘラ切り後ナデで、一部に回転ヘラケズリが施された可能性がある。８世紀中頃～９世紀前半の時期と考えられる。５は完形の土師器無頸壺で、口径10.6cm、底径11.3cm、器高17.3cmである。口縁部外面は横方向のハケメ、胴部外面は不定方向のハケメ、底部・内面はナデで、胴部外面１ヶ所に黒斑がみられる。蔵骨器専用に製作された可能性が高い。

SK11土坑（図18）

3A区の北西端に位置する。平面は不整長方形で、長軸2.5m、短軸1.5m、深さ0.6mである。２層に地

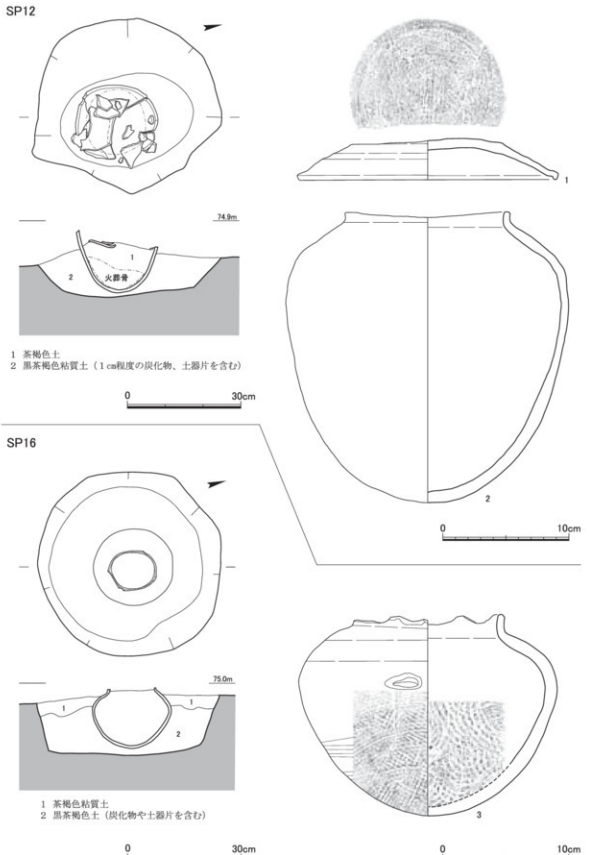
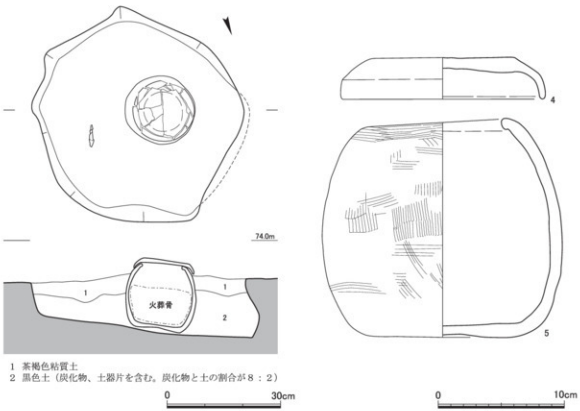


図14　SP12・16（1/10）、出土蔵骨器（1/3）



1　茶褐色粘質土
2　黒色土（炭化物、土器片を含む。炭化物と土の割合が８：２）

図15　SP13（1/10）、出土蔵骨器（1/3）

写真１　SP12火葬骨

写真２　SP16火葬骨

写真３　SP13火葬骨１

写真４　SP13火葬骨２

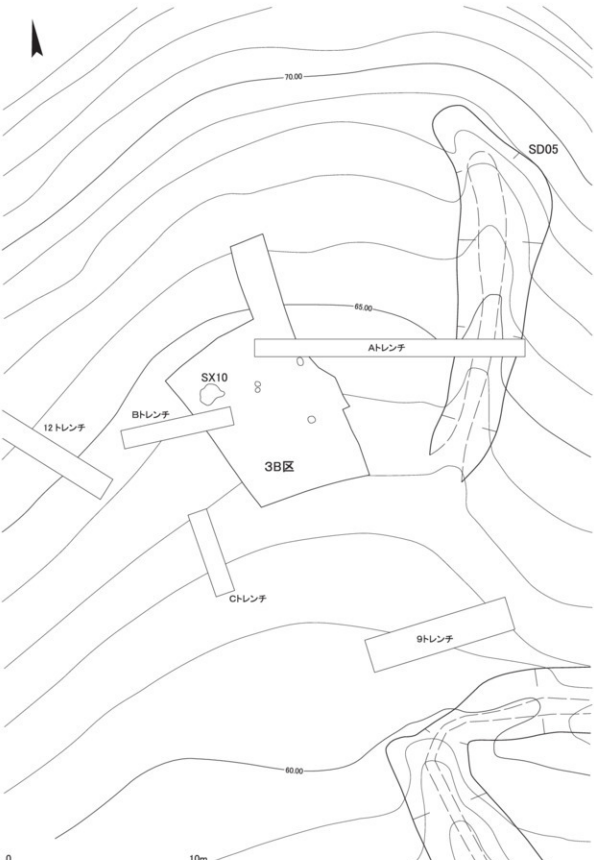


図16　3B区・周辺の遺構分布（1/200）

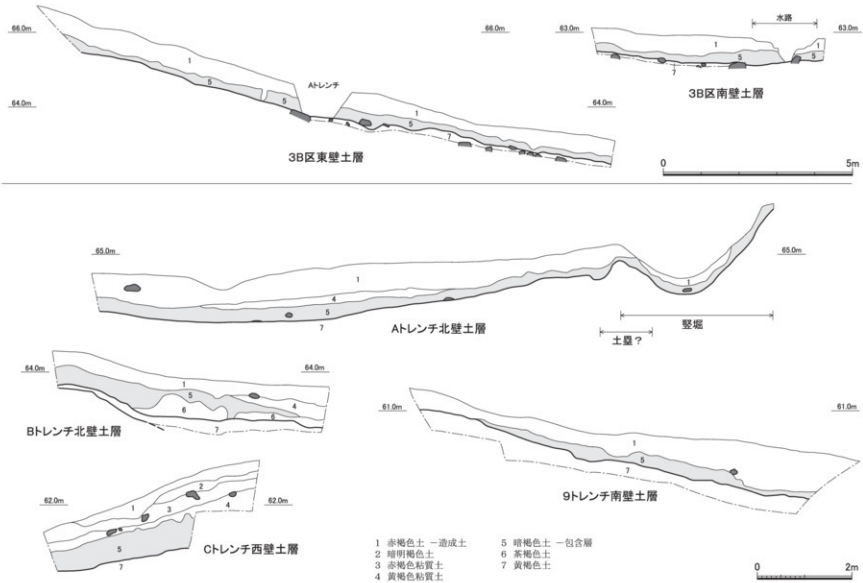


図17　3B区の土層（1/100）、周辺トレンチの土層（1/80）

山の堆積土が確認され、１層の黄色粘質土から無斑晶質安山岩製石鏃が出土した。

SX10焼土遺構（図18）

３B区の北西部に位置する。平面は不整方形で、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.2mである。埋土に焼土と炭化物を含む。性格や時期は不明である。

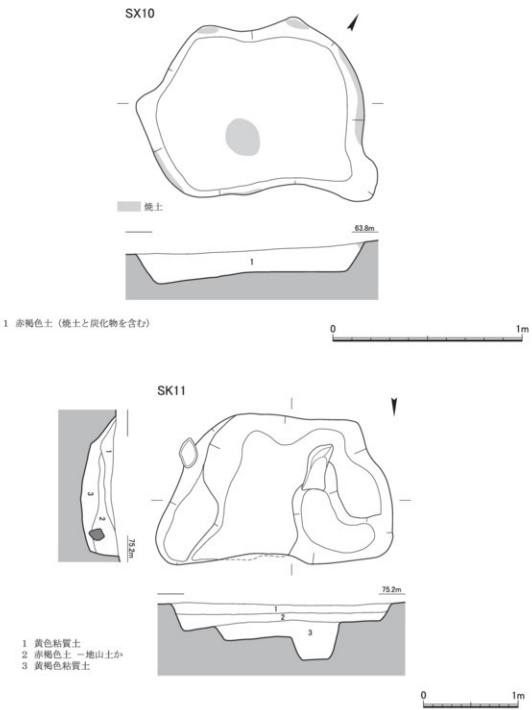


図18　SX10（1/20）、SK11（1/40）

SD05竪堀（図16・17）

３区中央に位置し、３B区に隣接する。幅３m、深さ２mを測るが、北側の傾斜が急な地点では地表面で最大幅５m、深さ４mである。里道との関係を確認するために設定した９トレンチでは、土層の変化はみられず、里道とは連結していなかったと判断した。

里道（図19・20）

３区中央部の南斜面から斜面に対して斜交しながら丘陵頂部まで続いているが、地域の住民によると現代になってからも利用していたようで、昔は丘陵を横断し北側の斜面まで続いていたとされる。里道自体は、地表面から２～３m掘り下げた溝状を呈し、上幅で２～３m、下幅で約１mの規模である。丘陵頂部付近では両脇に盛土状に高まりがみられ、一見すると山城の横堀や土塁と判断できるような形状になっていたため、４・６・８・13のトレンチを設定して調査を行った。４・８・13トレンチの土層を観察する限りでは、里道の南西部分は削平を受け、土塁状にみえる土は、客土による盛土であった。もともと、この地点は斜面地だったと思われ、里道部分の地山を掘り下げた後、東側に盛土した状況が考えられる。遺物には石器や須恵器片があるが、掘削の時期などを示すものは出土していない。

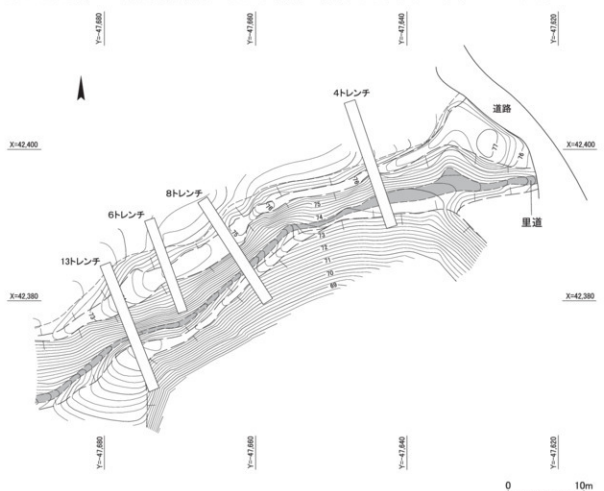
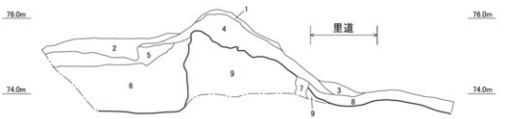


図19　３区里道周辺の地形（1/500）

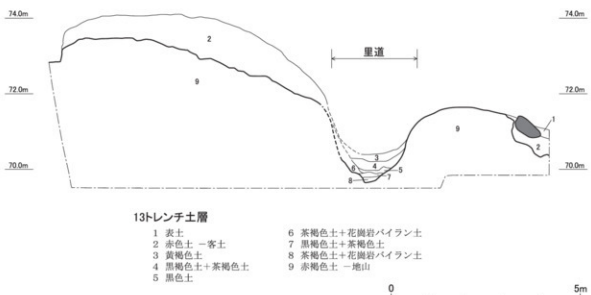


4トレンチ土層

1 茶褐色砂質土
2 黄色砂質土＋茶褐色土
3 赤褐色土＋礫層
4 黄褐色砂質土＋黒色土
5 黄色砂質土
6 茶褐色土 －客土
7 黒色土
8 赤褐色土＋黒褐色土
9 赤褐色土 －地山

8トレンチ土層

1 表土
2 赤色土
3 赤褐色粘質土
4 赤褐色土



13トレンチ土層

1 表土
2 赤色土 －客土
3 黄褐色土
4 黒褐色土＋茶褐色土
5 黒色土
6 茶褐色土＋花崗岩バイラン土
7 黒褐色土＋茶褐色土
8 茶褐色土＋花崗岩バイラン土
9 赤褐色土 －地山

0 5m

図20　3区里道の土層（1/100）

５　１・３区の遺物

今回の調査では、１・３区において縄文時代～近世の遺物が出土したが、出土量は少なく、実測可能なものはなるべく図化した。ここでは、前述した蔵骨器以外の遺物について、確認調査で出土したものも含めて説明する。

弥生時代～近世の遺物（図21）

６～９は１区から出土した。６は須恵器杯蓋で、口縁端部内面に段を持つ。口縁部と天井部の境には明瞭な稜をもつものと考えられる。７は須恵器杯蓋としたが、杯身の可能性もある。天井部に回転ヘラケズリが施される。８は須恵器壺で、内外面ヨコナデである。９はSX01出土の須恵器で、長頭壺と判断

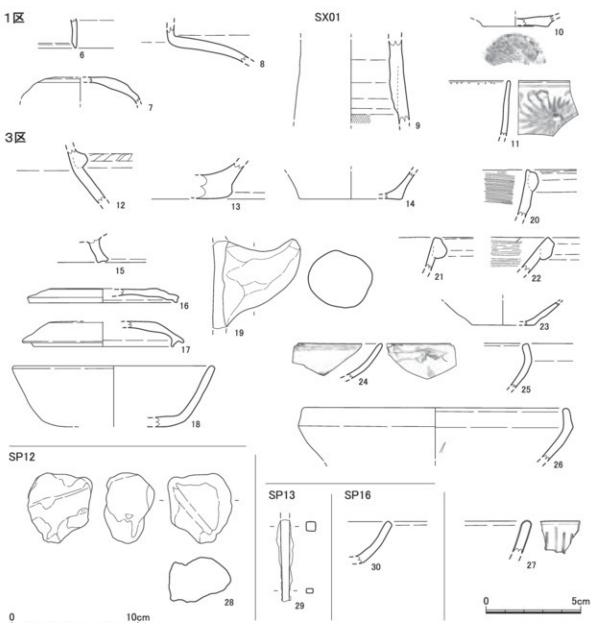


図21　１・３区出土弥生時代～近世の遺物（1/3、27は1/2）

したが、確実ではない。内外面ヨコナデで、内面下部にハケメ状の調整がみられる。

10・11は平成15年度確認調査で出土した。10は底部糸切の土師器杯と考えられる。11は肥前の染付磁器蓋付鉢で、口縁部端部は無釉である。

12～30は３区から出土した。12は弥生土器壺で、突帯に幅の広い刻目が施される。13は弥生土器壺底部で、内外面ナデである。14は弥生土器鉢または壺の底部で、調整は不明である。

15は須恵器壺の高台で、内外面ヨコナデである。16は須恵器蓋で、天井部の一部に回転ヘラケズリが施される。17は須恵器杯蓋で、天井部はヘラ切り後ナデである。18は須恵器杯で、底部外面はヘラ切り後ナデである。19は土師器把手で、内面はヘラケズリである。

20～22は土師器鍋で、口縁部断面が玉縁状となる形態のものである。20・21の内面は目の細かいハケメである。23は土師器杯で、磨耗が著しく、調整不明である。24は福建省産と考えられる青花皿で、口縁部と見込みに界線を巡らせ、外面は唐草文と思われる。25は瓦質土器擂鉢または鉢と考えられる。26は瓦質土器擂鉢で、内面にわずかに擂目がみられる。27は青磁碗で、ヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつものであるが、剣頭は省略されている。

28はSP12墓壙内出土の土師器で、器種は不明である。一部に２次焼成の痕跡がみられる。29はSP13墓壙内出土の鉄製品で、上部は欠損しており、下部も欠損している可能性がある。30はSP16墓壙内出土の土師器杯である。

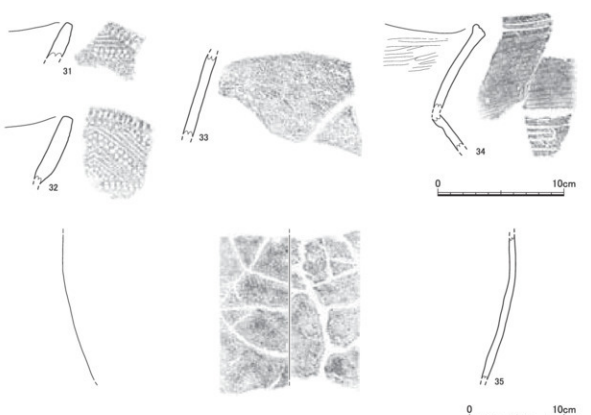


図22　１・３区出土縄文時代の遺物１（1/3、35は1/4）

縄文時代の遺物（図22・23）

31・32は早期平栫式で、同一個体の可能性がある。口縁端部に刻目が施され、外面には凹線と連点を用いて山形の文様が施される。器面調整は内面ナデである。33・35は無文のもので、出土状況などから縄文土器と判断した。器面調整は外面ミガキ、内面ナデと思われる。34は後期太郎迫式の精製深鉢で、器面調整はヘラミガキである。口縁部外面には２条の並行沈線文を巡らせ、その上位に刺突文が施され、胴部上位にはX字状文で区画される横走沈線文を巡らせ、その間に斜位の刺突文が施される。

36～40は石鏃である。形態はさまざまであるが、いずれも凹基のものである。36・39の石材は大分県姫島産黒曜石の可能性がある。40はいわゆる剥片鏃である。41・42は微細剥離痕のある剥片である。43は横型の石匙で、つまみの作り出しは丁寧であるが、石匙としてはサイズが小さい。44～48は無斑晶質安山岩の剥片で、45は他のものと比べ風化の度合いが異なる。

図23　１・３区出土縄文時代の遺物２（1/2）

表1　縄文時代～近世の出土遺物

挿図-番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm 口径	底径	器高	色　調	備　考	写真図版
図14-1 07003931	3 A区 SP12	須恵器 蓋	20.1	－	3.2	オリーブ灰	－	13
図14-2 07003932	3 A区 SP12	須恵器 壺	－	－	22.9	明オリーブ灰	－	13
図14-3 07003935	3 A区 SP16	須恵器 短頸壺	－	－	15.9	外：灰 内：灰オリーブ	－	13
図15-4 07003934	3 A区 SP13	土師器 蓋	15.8	－	3.3	橙	－	13
図15-5 07003933	3 A区 SP13	土師器 無頸壺	10.6	11.3	17.3	外：橙 内：にぶい橙	黒斑	13
図21-6 06003736	1 区	須恵器 杯蓋	－	－	－	灰	－	12
図21-7 06003735	1 区	須恵器 杯蓋	－	－	－	黄灰	－	12
図21-8 06003737	1 区	須恵器 壺	－	－	－	褐灰	－	－
図21-9 06003738	1 区 SX01	須恵器 長頸壺？	－	－	－	暗赤灰	－	12
図21-10 06003743	確認調査 12トレンチ	土師器 杯	－	5.0*	－	にぶい橙	底部糸切	14
図21-11 07003955	確認調査 3トレンチ	染付磁器 蓋付鉢	8.8*	－	－	灰白	肥前磁器、19ｃ前半	14
図21-12 07003940	3 B区	弥生土器 壺	－	－	－	橙	－	12
図21-13 07003939	3 B区	弥生土器 壺？	－	－	－	橙	－	12
図21-14 07003950	3 区 7トレンチ	弥生土器 鉢か壺	－	8.2*	－	橙	－	12
図21-15 07003954	3 区 13トレンチ	須恵器 壺	－	－	－	灰	－	12
図21-16 07003952	3 区 1トレンチ	須恵器 蓋	11.6*	－	－	灰	－	12
図21-17 07003941	3 B区	須恵器 杯蓋	12.8*	－	－	オリーブ灰	－	12
図21-18 07003951	3 区 10トレンチ	須恵器 杯	15.6*	－	－	灰	－	12
図21-19 07003945	3 B区	土師器 甑か鍋	－	－	－	橙	－	－
図21-20 07003953	3 区 1トレンチ	土師器 鍋	－	－	－	橙	－	14
図21-21 07003943	3 B区	土師器 鍋	－	－	－	橙	－	14
図21-22 06003739	3 区 Bトレンチ	土師器 鍋	－	－	－	にぶい橙	外面煤付着	14
図21-23 06003740	3 区 Aトレンチ	土師器 杯	－	3.0*	－	外：灰黄 内：浅黄橙	－	14
図21-24 07003944	3 B区	青花 皿	－	－	－	釉調：浅黄 胎土：橙	－	14
図21-25 06003742	3 区 Aトレンチ	瓦質土器 擂鉢か鉢	－	－	－	灰	－	14
図21-26 06003741	3 区 Aトレンチ	瓦質土器 擂鉢	20.5*	－	－	にぶい黄橙	－	14
図21-27 07003942	3 B区	青磁 椀	－	－	－	釉調：オリーブ灰 胎土：にぶい黄橙	－	14

表1　縄文時代～近世の出土遺物

挿図-番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm 口径	底径	器高	色　調	備　考	写真図版
図21-28 07003938	3 A区 SP12	土師器	－	－	－	橙	－	－
図21-29 07003956	3 A区 SP13	鉄製品	－	幅 0.8	厚 0.7	－	－	13
図21-30 07003937	3 A区 SP16	土師器 杯	－	－	－	にぶい橙	－	12
図22-31 07003949	3 A区	縄文土器 深鉢	－	－	－	外：黒褐 内：明黄褐	－	10
図22-32 07003948	3 A区	縄文土器 深鉢	－	－	－	外：黒褐 内：にぶい黄橙	外面煤付着	10
図22-33 07003947	3 区 2トレンチ	縄文土器 深鉢	－	－	－	にぶい黄橙	外面煤付着	10
図22-34 07003930	1 区 SX01	縄文土器 深鉢	－	－	－	灰黄褐	－	10
図22-35 07003946	3 A区	縄文土器 深鉢	－	－	－	にぶい黄橙	－	10

表2　縄文時代の出土石器

挿図-番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm 長	幅	厚	重量 g	石　材	備　考	写真図版
図23-36 07003959	3 A区 SK17	打製石器 石鏃	1.7	1.4	0.4	0.9	黒曜石	－	11
図23-37 07003957	3 B区	打製石器 石鏃	3.8	2.4	0.4	12.7	無斑晶質安山岩	－	11
図23-38 07003958	3 A区 SK11	打製石器 石鏃	3.6	1.2	0.4	2.2	無斑晶質安山岩	－	11
図23-39 07003964	3 A区	打製石器 石鏃	2.0	1.7	0.3	0.7	黒曜石	－	11
図23-40 07003965	3 A区	打製石器 石鏃	2.2	1.2	0.3	0.4	黒曜石	－	11
図23-41 07003963	3 区 13トレンチ	打製石器 MF	2.7	1.1	0.5	0.8	黒曜石	－	11
図23-42 07003966	3 区 1トレンチ	打製石器 MF	2.5	1.5	0.3	1.8	黒曜石	－	11
図23-43 07003960	3 B区	打製石器 石匙	3.4	5.2	0.6	8.8	無斑晶質安山岩	－	11
図23-44 07003969	3 A区	打製石器 剥片	4.8	3.0	1.1	13.7	無斑晶質安山岩	－	11
図23-45 07003961	3 A区	打製石器 剥片	7.9	2.4	1.0	16.7	無斑晶質安山岩	－	11
図23-46 07003968	3 区 13トレンチ	打製石器 剥片	4.8	3.3	1.1	16.2	無斑晶質安山岩	－	11
図23-47 07003967	3 区 2トレンチ	打製石器 剥片	5.2	4.1	1.1	20.7	無斑晶質安山岩	－	11
図23-48 07003962	3 A区	打製石器 剥片	8.3	4.8	1.3	45.5	無斑晶質安山岩	－	11

第4章　まとめ

勝尾城下町遺跡１～３区の調査では、縄文時代～古墳時代の遺物、古代の墓地、中世の山城に関連する可能性がある遺構・遺物などを確認した。このうち、火葬墓と勝尾城と関連することについて簡単にまとめてみたい。

1　火葬墓について

３A区で検出された３基の火葬墓は、いずれも墓坑内に炭化物や土器片を含む土が充填されていた。墓坑内に被熱痕は確認できず、火葬施設に関係する遺構は検出されていないが、埋土に混入する炭化物や土器片は拾骨後に火葬場から墓坑内に移されたと推定される[注1)]。墓坑下層に炭化物を充填する行為については、墓坑内を良好な保存状態に保つ役割を担っていたと考えることができるが、土器が混入する点や意図的に火葬の際に形成された炭化物を使用する点から、儀礼的な意味合いが強いと推測される。また、SP13蔵骨器内から出土したコメと推定される炭化物や繊維状の遺物も、納棺―荼毘―拾骨―納骨という一連の過程の中での葬送儀礼に深く関係する出土品として注目される。

SP13蔵骨器のような土師器無頸壺は、村田文夫氏（1993）によれば[注2)]、蔵骨器専用に造られた可能性が高いとされる。このような土師質専用型蔵骨器の出土は、関東地方を中心に分布することが分かっており、福岡県太宰府市宮の本遺跡や福岡県甘木市池の上墳墓群などでも類例がある[注3)]。ただ、SP13火葬墓や池の上墳墓群で確認される土師質の専用型蔵骨器は転用型蔵骨器と混在しており、専用型蔵骨器と転用型蔵骨器の使い分けが何を意味するのかは、今後検討を要する。

８世紀に入って四位以下の官僚から庶民に至るまで公的な墓の造営が禁止されるが、実際には考古資料として蔵骨器・土坑墓・木棺墓などの埋葬施設・納骨施設は存在し、一定の範囲で墓域は形成され続ける。古代の墓域では副葬品の出土が少なく、被葬者の階層性や当時の社会を解明し難いが、こうした墓域が官衙的施設や群集墳の周辺で発見される例があることから、墓の受容者は官衙関係者や在地有力氏族である可能性が指摘されている[注4)]。今回の調査では、被葬者を特定できるような調査成果を得ることができず、墓域の一部を検出できたに過ぎない。今後、発掘事例の増加を待って、墓域の構成要素や各墓の序列化・性格を整理することで古代の地域社会を読み解くものさしになると考えられる。

2　石垣について

１区で検出されたSX02・03石垣については、周辺の筑紫氏館跡やその他の屋敷地の石垣と比べると、石垣意匠が弱く全体的に貧弱である。石垣検出の際に須恵器片が出土したが、石垣の明確な時期については特定できていない。しかし、このような貧弱で等高線に沿って積まれる石垣は、熊本県菊鹿町米の山城跡や鹿児島県加世田市別府城跡などでも見られ、中世まで遡る可能性もある。勝尾城筑紫氏遺跡群の山城や屋敷地、その他周辺の石垣の規模・技法の整理を進め、比較検討する必要がある。

３　調査区の位置付け

今回の調査では３B区で戦国期の遺物が出土したが、丘陵頂部が大規模な削平を受けており、明確な中世関係の遺構はほとんど把握できなかった。そこで、周辺の中世遺跡・歴史的環境から今回の調査区の位置付けを行いたい。

図24は九州横断自動車道が開通する以前の山浦町周辺の地形を復元し、発掘調査にあわせて行った地名聞き取り調査の成果を重ねたものである。聞き取り調査で１人にしか確認できなかった地名には「？」を付けている。

勝尾城の外郭線を成す総構え空堀は、安良川右岸にその痕跡が確認でき、安良川から３区南斜面まで約400m以上続くことが知られている。平成18年度に３区南の水田部で確認調査を行ったが、削平の痕跡と河川の氾濫跡が確認されたのみで、堀がこの谷まで続いていたかどうかは不明である。聞き取り調査では、安良川左岸の牛原地区で「ホリノカシラ」の地名を特定することができた。この「ホリノカシラ」は総構え空堀の延長部にあたり、連結していたか不明であるが、総構え空堀同様の防塁線が安良川左岸にも形成されていた可能性がある。

周辺の地名についてみると、現在の新町の集落一帯は「カミヤ」と呼ばれ、「クウヤ（紺屋）」や「クボタ」などの呼び名が残っている。山浦新町遺跡３区で確認された町屋推定地付近は、「マエダ」と呼ばれ、安良川沿いに「マチバタケ？」という地名が残るものの「市」に関係する地名かどうか詳細は不明である。中世と関係が深いと想定される地名は次の通りである。

「カマノホカ」：調査区北側の水田部には地中に総構え空堀が残るが、その堀の外側を指す。「構えの外」の意味と考えられる。

「ジンションバル」：「カマノホカ」より一段下がる東側の水田部を指す。「陣所の原」か？

「ツグラジョウ」：葛籠城を指す。

「ジョウノコシ？」：山浦城の東の谷を指す？

「ジンザバタケ？」「ジンジャバル？」：同一の地名と考えられ、葛籠城の南側を指すらしいが、範囲を絞りきれなかった。神社関係か？陣関係か？

「シモミヤ」：四阿屋神社下宮と考えられるが、地域では牛原の香椎宮との関係が強いとされる？

このように、調査区は総構え空堀に隣接し、周辺には中世に関係深い地名が点在するといった歴史的環境にある。また図24からは、調査区と葛籠城が同じ丘陵上に立地することや、調査区から葛籠城までの丘陵南斜面が「タケオ」「ジンナイダ」方面に対しての防衛線を形成していたことが読み取れる。３区を含むこの防衛線には、SD05堅堀や竪堀群が総構え空堀を中心に配置され、３区中央部で確認される里道についても、鳥栖・三養基地区は等高線を無視した竪堀とも横堀とも判断できないような堀を有する山城が多く確認される地域であり[註5]、防衛線を形成する堀であった可能性がある。このような周辺の状況から、総構え空堀に隣接した丘陵頂部を中心に山城の曲輪が展開したことが推定される。

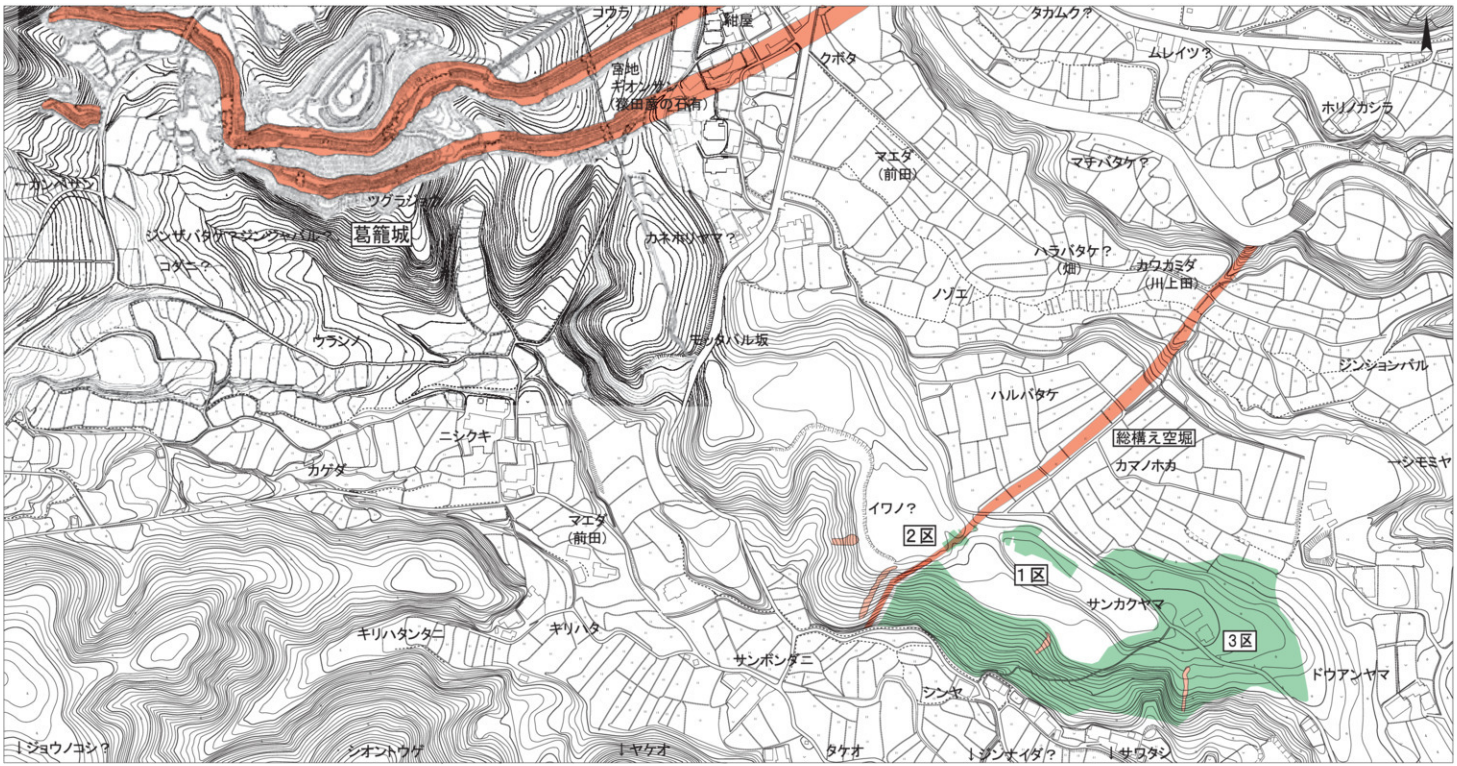
聞き取り調査においては、鳥栖市教育委員会の石橋新次氏、内野武史氏、鳥栖市文化財保護審議会の高尾平良氏を始め、地域住民の方々には大変お世話になった。記して御礼申し上げます。

注

1）大阪府柏原市太平寺・安堂遺跡では、蔵骨器内から出土した土器片と墓坑内炭化層から出土した土器片が接合したとされる。
2）専用型蔵骨器と転用型蔵骨器の名称を使用されているのは村田氏で、土師質の６形態の蔵骨器を紹介し、そのうち円筒形をしたものを蔵骨器専用に製作されたとしている（村田1993）。
3）福岡県甘木市池の上墳墓群では墓域の造営は８世紀中頃に始まり、８世紀後半から土師質専用蔵骨器の発生を確認できる。
4）大阪府柏原市田辺古墳群・墳墓群では、７世紀前半～８世紀中頃の古墳群と火葬墓群から構成される墓域の調査が行われ、８世紀初頭から発生する火葬墓の埋葬形態には田辺史氏が建立したとされる田辺廃寺の瓦や方専が用いられた可能性が高く、遺跡は田辺史氏が形成した氏族の墓域であった事が指摘されている。
5）宮武正登氏の御教示による。

第４章　参考・引用文献

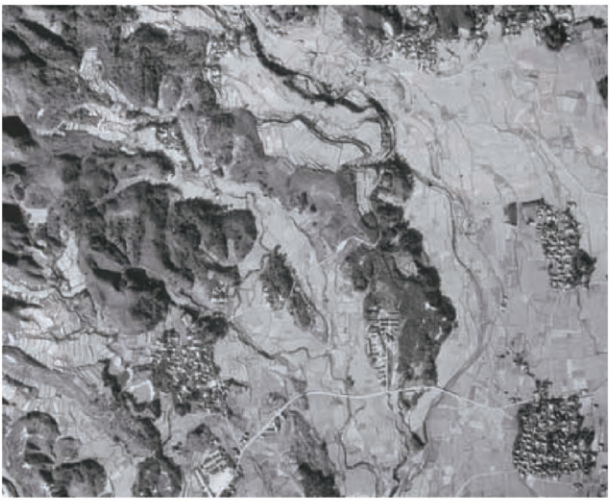
芦屋市教育委員会（2003）『摂津・藤ヶ谷古墓―藤ヶ谷遺跡第５地点・古代火葬墓の調査』芦屋市文化財調査報告書第48集
甘木市教育委員会（1979）『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書第５集
柏原市教育委員会（1984）『太平寺・安堂遺跡』柏原市文化財概報1983－Ⅵ
柏原市教育委員会（1987）『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要』柏原市文化財概報1986－Ⅳ
加世田市教育委員会（1995）『別府城跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
菊鹿町教育委員会（1999）『米の山城跡Ⅲ』菊鹿町文化財調査報告書第６集
小林　義孝（1999）「古代墳墓研究の分析視覚」『古代文化―日本における古墳の終焉から古代の墳墓へ（２）』第51巻12号
狭川　真一（1999）「北部九州における火葬墓の出現」『古代文化―日本における古墳の終焉から古代の墳墓へ（２）』第51巻12号
太宰府町教育委員会（1980）『宮の本遺跡』太宰府町の文化財第３集
鳥栖市教育委員会（1999）『勝尾城下町遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第57集
鳥栖市教育委員会（2004）『戦国勝尾城下町―甦る戦国の城下町』鳥栖市市制50周年記念事業
鳥栖市教育委員会（2006）『勝尾城筑紫氏遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第78集
鳥栖市教育委員会（2006）『九州戦国史　勝尾城下町―よみがえる戦国地代』鳥栖市勝尾城筑紫氏遺跡国史跡指定記念
松尾　禎作（1954）「東肥前出土奈良時代乃至平安初期の蔵骨器について」『佐賀県文化財調査報告書』第三輯　佐賀県教育委員会
村田　文夫（1993）『古代の南武蔵―多摩川の考古学』有隣新書
山口　耕一（1995）「専用型骨蔵器と転用型骨蔵器」『東日本における奈良・平安時代の墓制』第５回東日本埋蔵文化財研究会資料



矢印付きの地名は図外の少し離れた地点の地名

図24　調査区周辺の地名（1/6, 000）

写真図版



調査区周辺の空中写真（昭和22年米軍撮影）

調査区遠景（東から）

１区全景（西から）

１区全景（南東から）

２区全景（東から）

SX01（南東から）

SX01（北西から）

SX02（西から）

SX06（南西から）

SX02北西隅（北西から）

SX03（E面）・SX06（北東から）

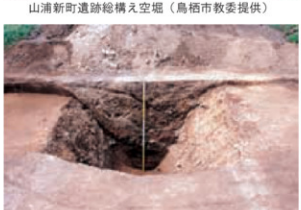
SX03（D面）（北から）

SX03裏込め石

SD04土層（北東から）

SD04（東から）

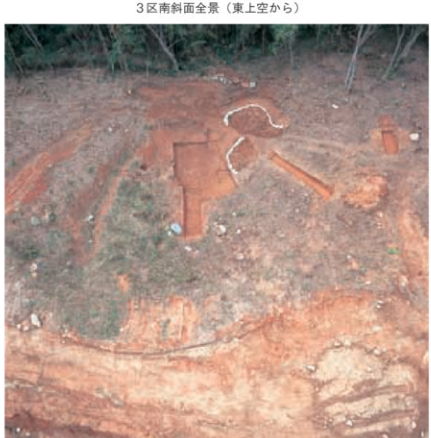
山浦新町遺跡総構え空堀（鳥栖市教委提供）



山浦新町遺跡総構え空堀土層（鳥栖市教委提供）

ほ場整備以前の総構え空堀の痕跡
（鳥栖市教委提供）

３区南斜面全景（東上空から）



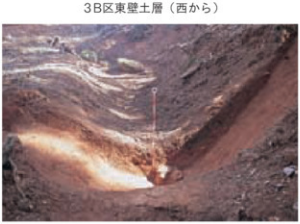
３B区周辺（北上空から）

3B区全景（北から）

SX10（北から）

3B区東壁土層（西から）

3B区南壁土層（北から）

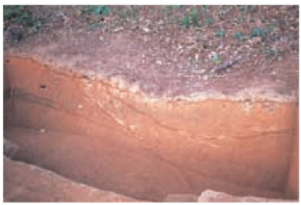


3区Aトレンチ北壁土層（南から）

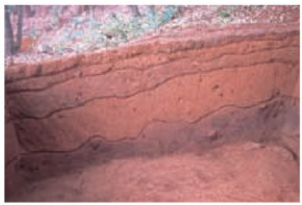
3区９トレンチ南壁土層（北から）

SD05（北から）

SD07（北から）



３区１トレンチ北壁土層（南から）



３区７トレンチ西壁土層（東から）

３区里道（真上から）

３区里道（西から）

３区里道調査前状況（東から）

３区４トレンチ土層（西から）

３区13トレンチ土層（西から）

３区13トレンチ土層（北東から）

SP12（東から）

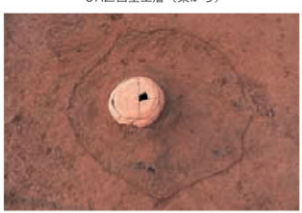
SP13（北から）

SP16（西から）

3A区全景（東から）

3A区西壁土層（東から）

SP12火葬骨出土状況（東から）



SP13検出状況（南から）

SP13土層（北から）

SP16土層（東から）

3A区縄文土器出土状況

3A区縄文土器出土状況

縄文時代の土器

縄文時代の石器

弥生時代の遺物

古墳時代の遺物

SX01出土遺物

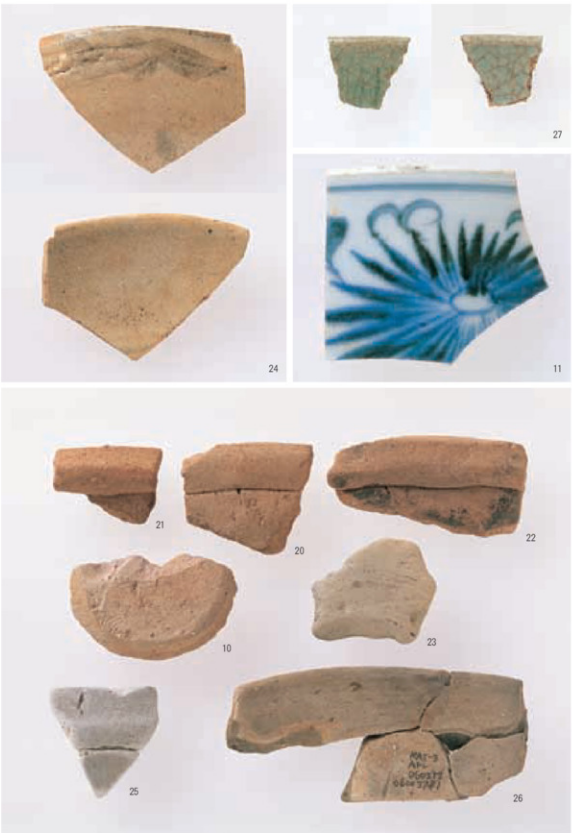
奈良・平安時代の遺物

SP12蔵骨器

SP16蔵骨器

SP13出土遺物

SP13蔵骨器



中・近世の遺物

付　編

幸津遺跡補遺

幸津遺跡補遺

1　はじめに

新幹線鹿児島ルート建設に伴い佐賀県教育委員会が調査した幸津遺跡については、平成18年度に本書に先行する「九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書１」として報告書が刊行されている。弥生時代前期の環濠の可能性があるSD01溝跡を中心に報告されており、特に前期の石器については、人力掘削の調査精度が低いにもかかわらず、詳細な報告がなされている。

ただ、霞堤について説明不足のところがあり、また追加事項、事実誤認などもあるため、本書において補遺として報告することにする。なお、『幸津遺跡』に掲載されている遺物を再掲した場合は報告書で付された遺物番号をそのまま使用し、新たに掲載した遺物については改めて１から番号を付した。

図25　幸津遺跡の遺構分布（1/200）

2　弥生・古墳時代

弥生時代は、今回の調査で遺構・遺物ともっとも多く確認される時期である。前期のSD01溝跡、後期前半のSH07竪穴住居跡などが検出されており、遺構は確認されないものの中期の土器も多数出土している。古墳時代は、弥生時代に比べれば遺構・遺物は減少するが、前期のSH05竪穴住居跡、前～中期の高杯杯部を埋置したSX02・03・04土坑、後期のSH06竪穴住居跡などがある。

SB19掘立柱建物跡（図26）

調査区南西に位置する掘立柱建物であるが、東隅の柱穴が誤っており、また柱穴からの出土遺物もあるため、修正・追加して報告する。梁行１間（2.6m）×桁行２間（4.6m）で、主軸をN45°Eにとる側柱建物である。桁行柱間は2.2～2.4mで、建物を構成する柱穴は一辺0.4～0.7mの方形基調である。遺物は弥生土器甕・高杯が出土している。

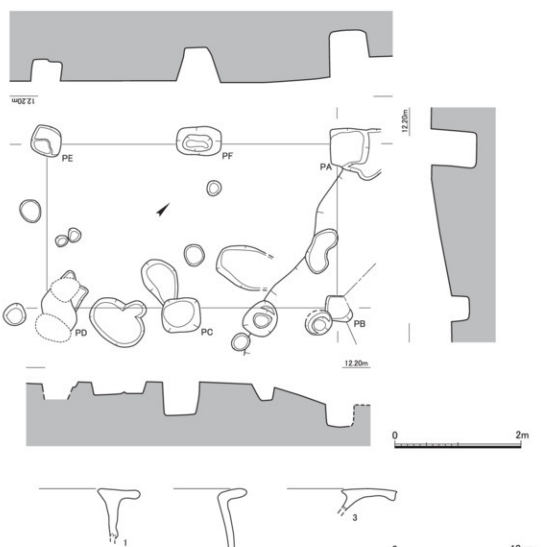


図26　SB19（1/60）、出土遺物（1/3）

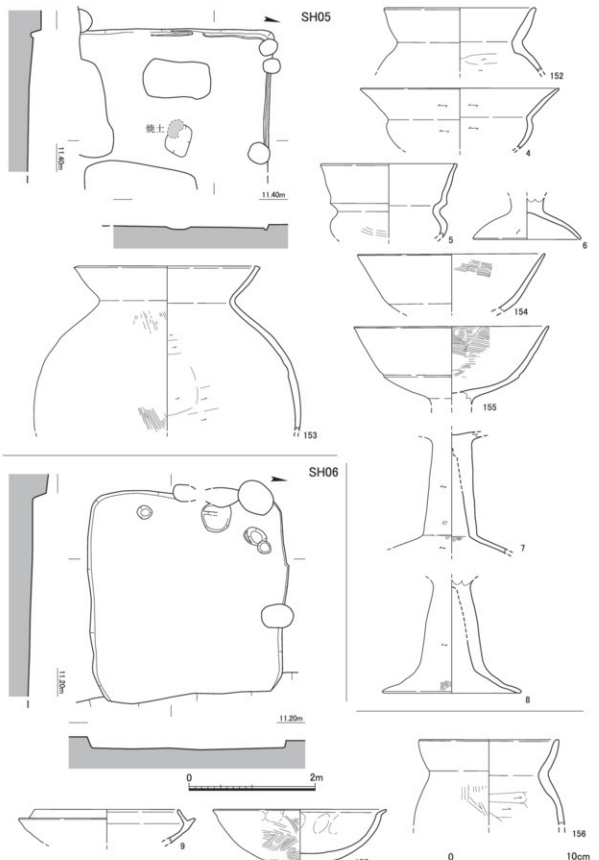


図27　SH05・06（1/60）、出土遺物（1/3）

1は逆L字形口縁の弥生土器甕で、2は屈折口縁の弥生土器甕である。3は弥生土器高杯で、丹塗りの痕跡がみられる。出土土器は須玖Ⅱ式に当るが、SH07竪穴住居跡と主軸方向が近いことから、後期前半の掘立柱建物の可能性がある。なお、方位からみると、調査区北部に位置し、古墳時代前期に推定されたSH08・09竪穴住居跡も弥生時代のものである可能性がある。

SH05竪穴住居跡（図27）

調査区南東に位置する平面長方形ないしは方形の竪穴住居であるが、掲載された遺物の他にも時期を決定する手がかりとなる遺物があるので、追加して報告する。なお、住居床面に焼土がみられるが、一般的な炉跡とは異なる印象があり、火を用いた作業場であった可能性もある。

153は土師器甕で、口縁部はわずかに内彎し、肩部は横方向のナデでハケメが消されている。152は土師器壺で、胴部外面はナデである。4は土師器鉢で、内外面に横方向の細かなヘラミガキが施される。5は山陰系の土師器壺で、胴部下半は粗いハケメである。6は土師器高杯脚部としたが、脚部が直立していることから弥生土器の可能性がある。外面はヘラミガキ、内面はナデで、穿孔が施されている可能性がある。154・155は土師器高杯で、154は内面ハケメのちミガキ、外面ミガキと考えられる。155は、外面ヘラミガキ、内面ハケメのちヘラミガキである。7は土師器高杯脚部で、外面はヘラミガキで一部にハケメがみられ、裾部内面はハケメのちナデである。8は土師器高杯脚部で、外面はヘラミガキで一部にハケメがみられ、内面はナデである。出土遺物から蒲原編年の土師本村2～3式期の住居と考えられる。

SH06竪穴住居跡（図27）

調査区南東に位置する平面方形の竪穴住居であるが、SH05竪穴住居跡と同様、遺物を追加して報告する。なお、西壁中央付近に焼土があり、竈の痕跡と記述されているが、現地で明確には確認できておらず、その可能性を指摘することにとどめておきたい。

9は須恵器杯身である。157は土師器杯で、底部外面に黒斑がみられる。156は土師器壺である。出土遺物から6世紀後半の住居と考えられる。

3　奈良・平安時代

古代については、出土遺物が少なく、遺構も後述するように粘土採掘坑と柵列跡がこの時期の可能性があるだけであるが、越州窯系青磁が出土するなど貴重な資料も含まれるため、追加して説明したい。

粘土採掘坑（図28）

調査区中央北側から東にかけて平面不定形の土坑（SX11～14）が重複するように十数基確認されているが、これについては粘土採掘坑の可能性があると推定される。ここでは、その根拠について追加説明するとともに、時期についても改めてみたい。なお、SX14土坑と重複するSX18土坑が報告されているが、

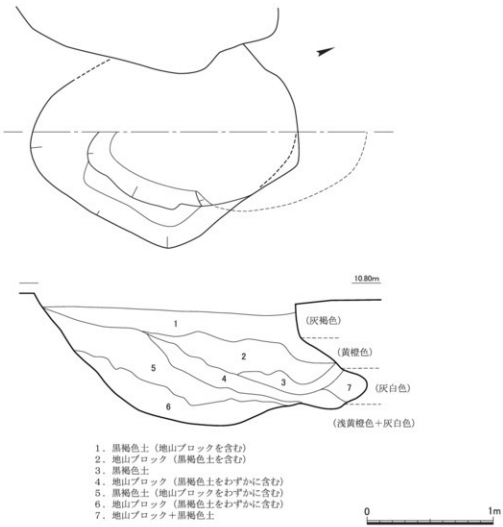

10.80m
1
2
3
4
5
6
7
（灰褐色）
（黄橙色）
（灰白色）
（浅黄橙色＋灰白色）
1．黒褐色土（地山ブロックを含む）
2．地山ブロック（黒褐色土を含む）
3．黒褐色土
4．地山ブロック（黒褐色土をわずかに含む）
5．黒褐色土（地山ブロックをわずかに含む）
6．地山ブロック（黒褐色土をわずかに含む）
7．地山ブロック＋黒褐色土
0
1m

図28　SX12（1/30）

現場では一括してSX14土坑として調査しており、新旧関係も明確ではなく、また別にSD18溝跡として番号を付しているので、SX18土坑については削除する。

これらの土坑については、調査期間の問題から完掘することができず、情報量が少ないが、SX12土坑にその性格をうかがい知ることができる部分があるため、土層図と写真を再掲した。SX12土坑は平面が長軸約2.1mの不整形で、検出面からの深さは0.8～1.0mである。埋土は表土に起因すると考えられる黒褐色土と地山土で構成され、埋め戻されたものと推測される。北側の壁面を横に大きく掘り込んでいるが、その高さの地山は灰白色粘土である。SX11～14土坑はSX12土坑と同様の埋土であり、形状も類似しているため、これらの土坑は灰白色粘土を目的に掘られたものと考えられる。

時期については出土遺物が少ないため、確実ではないが、SX13土坑出土土器（図29：169）を手がかりとしたい。169は土師器甕で、球形の胴部と比較的器壁が薄いことが特徴である。類例としては、サイズが異なるものの吉野ヶ里町（旧東脊振村）浦田遺跡SB009住居跡出土甕があり、このような甕は大宰府編年のⅤ・Ⅵ期並行期と考えられる。このことから、確認された粘土採掘坑は奈良時代後半～平安時代前半の時期である可能性が高いといえよう。

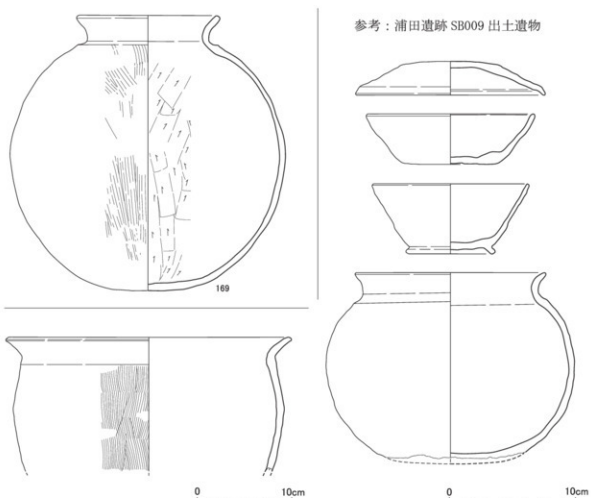


図29　SX13・浦田遺跡出土遺物（1/4・1/3）

越州窯系青磁（図30）

陶器椀として報告されているSD01溝跡上層出土の177は越州窯系青磁であり、改めて報告する。また、越州窯系青磁の可能性がある水注の破片も出土しているので、追加して報告する。

177は青磁碗で、大宰府分類では椀Ⅰ－５類（旧Ⅱ－３類）、橿原考古学研究所付属博物館の分類では碗ⅡC類に当たる。上げ底気味の平底で、体部外面最下部と底面は回転ヘラケズリである。重ね焼きの目跡が内外面にみられ、体部外面下半と底面は施釉されていない。佐賀県内の類例としては、佐賀市諸富町徳富権現堂遺跡SE120井戸跡、神埼市神埼町野田五本杉遺跡出土品が挙げられる。10は水注把手で、３本の縦沈線が施される。

越州窯系青磁椀Ⅰ－５類については、９世紀後半～10世紀中葉に出土時期の主体があるとされているが、未報告でこの時期と考えられる遺物が同じSD01溝跡上層と検出面からごく少量ではあるが出土しているため、追加して報告する。

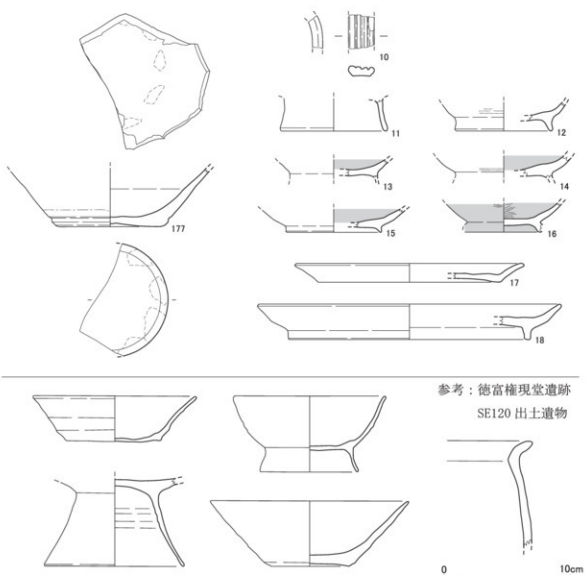


図30　奈良・平安時代の遺物、徳富権現堂遺跡出土遺物（1/3）

11は土師器椀高台部である。12は土師器椀で、体部外面はミガキの可能性がある。13～15は黒色土器A類椀で、いずれも内面はヘラミガキ、14は外面にミガキがみられる。16は黒色土器B類椀で、内外面ヘラミガキである。

また、検出面出土の奈良時代の遺物も、追加して報告する。17は須恵器皿で、底面はナデである。18は土師器高台付皿である。

柵列跡（図31）

時期は奈良・平安時代と確定できないが、柵列跡３条が確認されるので、追加して報告する。

SA20柵列跡は調査区北東部に位置し、柱穴がN３°Eの南北方向に列をなす。柱間は1.3～1.6m、柱穴は径0.3～0.4mの円形基調で、柱痕跡は径約0.2mである。遺物は出土しなかった。

SA21柵列跡は調査区中央部東寄りに位置し、柱穴がN３°Wの南北方向に列をなす。柱間は1.6～1.8m、柱穴は径0.5～0.6mの円形基調で、柱痕跡は径約0.2mである。遺物は土師器杯、須恵器杯が出土している。

19は土師器杯で、底面は回転ヘラケズリである。20は土師器杯で、底面はナデである。

SA22柵列跡は、調査区南部に位置する柱穴がN13°Wの南北方向に列をなす柵列であるが、柱穴を完掘していないため、個別図は掲載していない。遺物は古代の須恵器杯、土師器片が出土したが、小片のため図示していない。

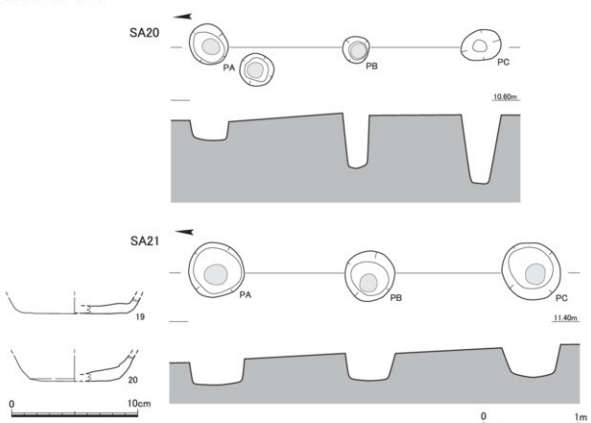


図31　SA20・21（1/40）、出土遺物（1/3）

4　近世

近世は霞堤に伴う盛土が確認される。霞堤は安良川右岸に立地する堤防の通称名で、本堤防と決壊した際に遊水地をつくるための副堤（二線堤）、これに伴う幸津井樋を始めとする水利施設などからなっており、JR鹿児島線から南側の副堤が平成15年度に鳥栖市教育委員会によって調査されている。今回の調査区は副堤が段丘と接する周辺に位置しており、調査区東側に堤防、堤防と調査区の間に暗渠をなす上川原堰がある。

霞堤に伴う盛土

調査区の調査以前の地形（図33）は標高11.5～12.4mの平坦面で、調査区西側は段丘に続くが、北側は約１mの段落ちとなり、東側は上川原堰と水路を挟んで副堤があり、南側は平面コ字形に削平され、約２mの段落ちとなっており、調査区は周囲からみると高台になっている。

調査では全面的に表土を除去する前に試掘坑を２ヶ所設定して、土層（CD・EF）を観察した。その結果、副堤と上川原堰に伴う盛土を確認したが、この時点でSD01溝跡を検出したため、盛土は掘削機で除去せざるをえず、盛土に伴うと考えられるような遺物については確認できなかった。調査区東壁の土層（AB）と合わせて層位をみると、大きく７層に分層可能で、次のように判断した（図34）。

１・２層：盛土及び表土
３層：盛土以前の旧表土
４層：堆積土
５層：粘土採掘坑埋土
６層：粘土採掘坑以前の堆積土
７層：遺構埋土

このうち、３層は一部にしか確認できないため、盛土を行なう際、ある程度整形されたものと考えられる。盛土については、１層が黄橙色系統の、２層が灰褐色系統の土を用いており、時期差になる可能性がある。なお、１・２層の広がりについては土層観察が十分ではないため確実ではないが、おおよそ調査区北東部に限ってみられるようである。

このようなことから、本来北東方向になだらかな斜面地であった部分を整形した後、堤防にすりつくように盛土を行い、斜面地と堤防の間に暗渠を設置したことが推測される。

盛土の構築時期

時期については、前述のように出土遺物の面から直接的には検討できないため、鳥栖市教育委員会の調査成果から推測してみたい。JR鹿児島線から南側の副堤では５期の築堤過程を復元している。

第１期：堤敷幅約10m・17世紀前半の遺物が出土
第２期：堤敷幅約13m・17世紀後半～18世紀前半の遺物が出土
第３期：堤敷幅約20m・18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土

図32　調査区周辺の地形（1/5,000）

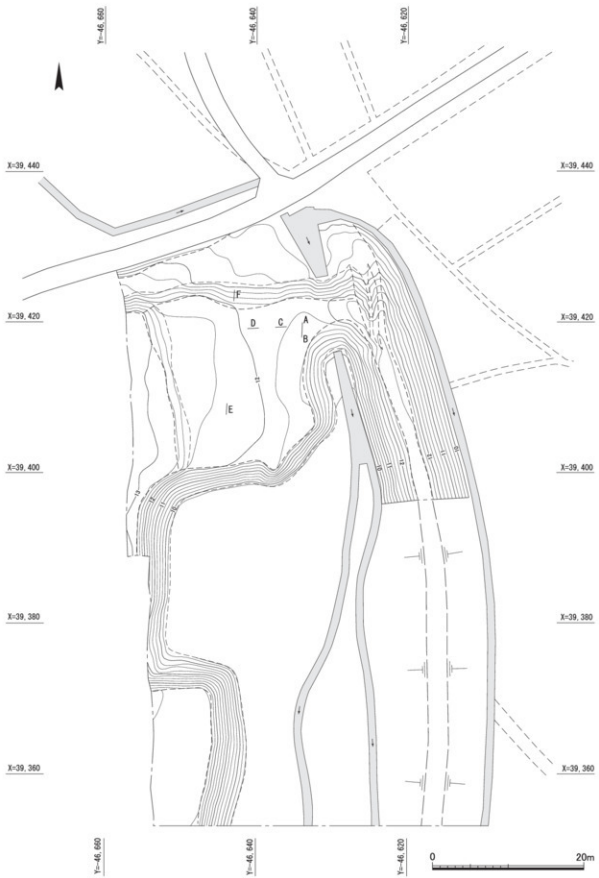
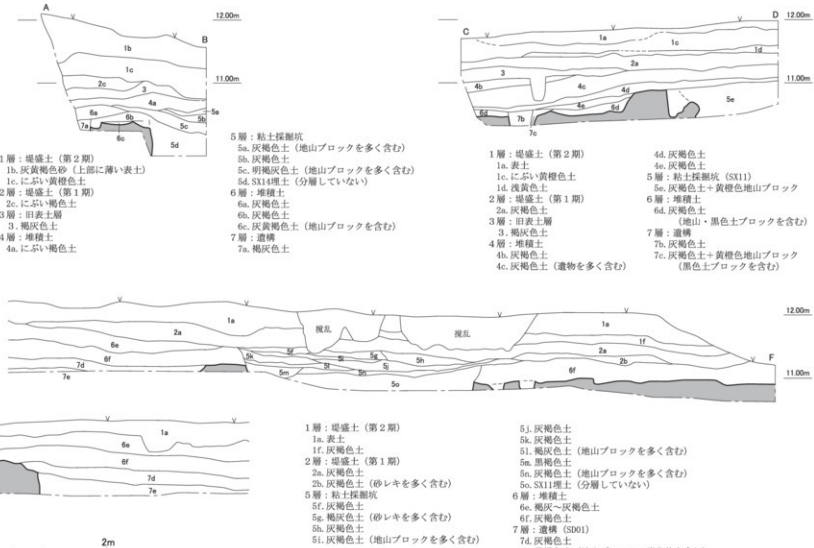


図33　調査区周辺の地形詳細（1/500）



1層：堤盛土（第２期）
1b. 灰黄褐色砂（上部に薄い表土）
1c. にぶい黄橙色土
2層：堤盛土（第１期）
2c. にぶい褐色土
3層：旧表土層
3. 褐灰色土
4層：堆積土
4a. にぶい褐色土

5層：粘土採掘坑
5a. 灰褐色土（地山ブロックを多く含む）
5b. 灰褐色土
5c. 明褐灰色土（地山ブロックを多く含む）
5d. SX14埋土（分層していない）
6層：堆積土
6a. 灰褐色土
6b. 灰褐色土
6c. 灰黄褐色土（地山ブロックを含む）
7層：遺構
7a. 褐灰色土

1層：堤盛土（第２期）
1a. 表土
1c. にぶい黄橙色土
1d. 浅黄色土
2層：堤盛土（第１期）
2a. 灰褐色土
3層：旧表土層
3. 褐灰色土
4b. 灰褐色土
4c. 灰褐色土（遺物を多く含む）

4d. 灰褐色土
4e. 灰褐色土
5層：粘土採掘坑（SX11）
5e. 灰褐色土＋黄橙色地山ブロック
6層：堆積土
6d. 灰褐色土
（地山・黒色土ブロックを含む）
7層：遺構
7b. 灰褐色土
7c. 灰褐色土＋黄橙色地山ブロック
（黒色土ブロックを含む）

1層：堤盛土（第２期）
1a. 表土
1f. 灰褐色土
2層：堤盛土（第１期）
2a. 灰褐色土
2b. 灰褐色土（砂レキを多く含む）
5層：粘土採掘坑
5f. 灰褐色土
5g. 褐灰色土（砂レキを多く含む）
5h. 灰褐色土
5i. 灰褐色土（地山ブロックを多く含む）

5j. 灰褐色土
5k. 灰褐色土
5l. 褐灰色土（地山ブロックを多く含む）
5m. 黒褐色土
5n. 灰褐色土（地山ブロックを多く含む）
5o. SX11埋土（分層していない）
6層：堆積土
6e. 褐灰～灰褐色土
6f. 灰褐色土
7層：遺構（SD01）
7d. 灰褐色土
7e. 黒褐色土（地山ブロック・炭化物を含む）

図34　調査区の土層（1/60）

第４期：堤敷幅約25m・昭和28年大水害後の拡張

第５期：堤敷幅約30m

これに対して、鹿児島線の北側の副堤は現状で堤敷幅11～16mで、第２期の幅とほぼ同じであり、古い様相を残していると考えられる。ただし、高さについては約12.5mで、北側と南側で大差がない。このことから、調査区東側の堤は基本的には江戸時代前半期の姿を残しているが、戦後やや改変を受けたものと推測される。なお、昭和23（1948）年撮影の空中写真（写真図版15）では、副堤の幅の南北差はあまり顕著ではなく、調査区周辺の地形は調査前の状況と大きな差異がないことが読み取れる。

また、間接的ではあるが、出土した蔵骨器の面からも時期について考えてみたい。21・22と23・24はセットとなる土師器盌と壺で（図35）、人骨は出土しなかったものの蔵骨器と考えられ、器壁の厚さや器面調整の差異などから明らかに時期差があるものとみられる。21・22と類似したものは鳥栖市今泉遺跡で江戸時代の土師器杯を伴って出土した例があり、21・22は近世、23・24は近代のものと推測する。これらは直接盛堤に伴う盛土を掘り込んで埋納されたものではないが、ともにSB19掘立柱建物跡周辺のほぼ同じ標高で検出されていることから、調査以前の地形が江戸時代の状況から大きく改変されていないことの傍証にはなろう。

以上のことから、調査区周辺は江戸時代前半期の姿を色濃く残していたものと考えられ、盛土の１層と２層をそれぞれ第２期と第１期築堤に対応させることは可能であろう。

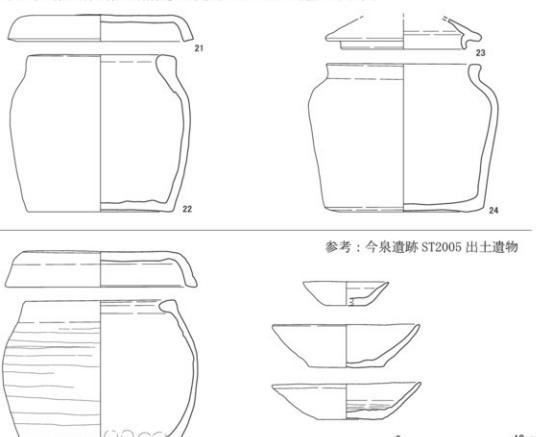


図35　近世・近代の遺物、今泉遺跡出土遺物（1/3）

5　小結

幸津遺跡やその周辺の遺跡については、本行遺跡で鋳型など青銅器生産に関わる遺物が多数出土していることから、弥生時代には柚比本村遺跡、安永田遺跡を含む柚比遺跡群と比較される遺跡群と推定されるなど、鳥栖市域でも古くからの中心的な地区の一つとみられるが、考古学的な調査例が少なく、不明な点が多い。今回ごく狭い範囲の調査ではあるが、幸津遺跡の一端をうかがうことができる調査成果があるため、時代順に簡単にまとめてみたい。

縄文時代については、石器に縄文時代の可能性がある資料があるものの明確ではない。弥生時代になると、前期の環濠と推定される溝が確認され、後期まで遺構・遺物が確認されることから、中心的な集落であることが明らかになりつつある。古墳時代にも前～後期の集落の存在が確認される。奈良・平安時代では遺構・遺物は少なくなるものの、越州窯系青磁が出土するなど、やはり中心的な地域であったことが推測される。このように、弥生時代から平安時代前期にかけては断続的ながら地域の中心的な位置を占めていたことが示唆される。

これに対して、中世についてまったくといっていいほど生活の痕跡を確認することができなかった。文献には「幸津荘」「幸津新荘」などがみられ、荘園の存在を示しているが、今回の調査ではこれを裏付けるような資料は出土しなかった。おそらく、現在の集落においても東端に当たる調査区周辺にまで荘園の範囲が広がっていなかったことが考えられる。

近世については、大規模な治水工事の一端を知る資料を提示することができた。霞堤は洪水対策とともに、幸津井樋で分水することによって多くの水田を灌漑する水利施設としての役割も大きい。江戸時代における新田開発にかかわる大規模な治水事業の技術力の高さをうかがい知ることができる遺跡は、近年の開発により消滅することも多いが、今回の調査区東側にわずかではあるが残された江戸時代の堤の姿をとどめる部分は貴重なものといえよう。

このように、幸津遺跡周辺は鳥栖市内の中心的な地域としての歴史的位置付けが徐々に明らかになりつつあると思われる。今後、この地域の考古学的資料の更なる充実が望まれる。なお、出土遺物については蒲原宏行氏・徳永貞紹氏・山本信夫氏より多くの御教示を賜った。

付編　参考・引用文献

橿原考古学研究所附属博物館編（1993）『貿易陶磁―奈良・平安の中国陶磁―』

蒲原　宏行（1991）「古墳時代初頭前後の土器編年―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集

佐賀県教育委員会（1983）「浦田遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集

鳥栖市教育委員会（2002）『藤木遺跡・今泉遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第68集

鳥栖市教育委員会（2005）『幸津霞堤』鳥栖市文化財調査報告書第75集

諸富町教育委員会（1984）『徳富権現堂遺跡』諸富町文化財調査報告書第１集

表３　幸津遺跡の出土遺物

挿図-番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm 口径	底径	器高	色　調	備　考	写真図版
図26-1 08000717	SB19 PF	弥生土器 甕	－	－	－	橙	－	－
図26-2 08000716	SB19 PF	弥生土器 甕	－	－	－	外：明赤褐 内：赤褐	－	－
図26-3 08000718	SB19 PA	弥生土器 高杯	－	－	－	浅黄橙	丹塗り	－
図27-153 06003017	SH05	土師器 甕	14.0*	－	－	外：にぶい黄褐 内：灰黄	再実測	17
図27-152 06003019	SH05	土師器 壺	11.8*	－	－	灰黄	再実測	－
図27-4 08000711	SH05	土師器 鉢	15.6*	－	－	橙	－	17
図27-5 08000710	SH05	土師器 壺	10.6*	－	－	灰黄褐	山陰系	17
図27-6 08000714	SH05	土師器 高杯	－	－	－	灰黄褐・橙	－	－
図27-154 06003110	SH05	弥生土器 高杯	14.8*	－	－	明赤褐	－	－
図27-155 06003018	SH05	土師器か 高杯	15.4*	－	－	橙	－	－
図27-7 08000712	SH05	土師器 高杯	－	－	－	橙	－	－
図27-8 08000713	SH05	土師器 高杯	－	－	－	浅黄橙・灰黄褐	－	－
図27-9 08000715	SH06	須恵器 杯身	11.4*	－	－	灰白	－	－
図27-157 06003021	SH06	土師器 鉢	13.7	－	4.4	赤灰	底部黒斑	－
図27-156 06003020	SH06	土師器 壺	11.1*	－	－	外：にぶい橙・褐灰 内：にぶい黄橙	－	－
図29-169 06003024	SX13	土師器 壺	15.1*	－	29.0	外：橙・浅黄橙 内：にぶい黄橙	－	－
図30-177 06003008	SD01 上部包含層	青磁 椀	－	9.2*	－	釉調：オリーブグリーン 胎土：灰・橙	越州窯系	17
図30-10 08000721	SD01 上部包含層	青磁 水注	－	－	－	釉調：灰オリーブ 胎土：灰黄	－	17
図30-11 08000722	SD01 上部包含層	土師器 椀	－	8.6*	－	橙	－	17
図30-12 08000723	SD01 上部包含層	土師器 椀	－	7.8*	－	にぶい橙	－	17
図30-13 08000724	SD01 上部包含層	黒色土器A類 椀	－	－	－	外：橙 内：オリーブ黒色	－	17
図30-14 08000725	SD01 上部包含層	黒色土器A類 椀	－	－	－	外：にぶい橙 内：黒色	－	17
図30-15 08000726	SD01 上部包含層	黒色土器A類 椀	－	7.6*	－	外：にぶい黄橙 内：灰	－	17
図30-16 08000727	検出面	黒色土器B類 椀	－	－	－	黒	－	17
図30-17 08000728	検出面	須恵器 皿	18.2*	14.5*	2.5	灰白	－	－
図30-18 08000729	検出面	土師器 高台付皿	24.1*	19.7*	2.8	外：浅黄橙 内：橙	－	－
図31-19 08000719	SA21 PB	土師器 杯	－	8.2*	－	橙	－	－
図31-20 08000720	SA21 PB	土師器 杯	－	7.0*	－	外：浅黄橙 内：淡橙	－	－
図35-21 08000731	検出面	土師器 蓋	14.8	－	2.1	浅黄橙	－	18
図35-22 08000732	検出面	土師器 壺	11.3	11.6	12.5	浅黄橙	－	18
図35-23 08000730	検出面	土師器 蓋	9.6*	－	－	浅黄橙	－	18
図35-24 08000733	検出面	土師器 壺	11.5	12.5	11.8	浅黄橙	－	18

付　編

写真図版

霞堤周辺の空中写真（昭和23年米軍撮影）

調査区遠景（北東から）

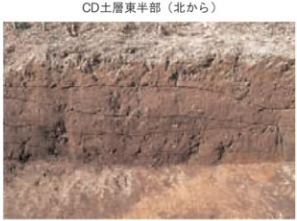
霞堤副堤（東から）

調査前現況（東から）

上川原堰（北から）

CD土層東半部（北から）

CD土層西半部（北から）



EF土層中央部（東から）

EF土層（北から）

AB土層（西から）

越州窯系青磁椀

SH05出土土器

青磁水注

平安時代の遺物

近世～近代の蔵骨器

蔵骨器各種

報告書抄録

ふりがな	かつのおじょうかまちいせき
書名	勝尾城下町遺跡
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	2
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第178集
編著者名	渋谷 格・田中 健一郎
発行機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840-8570　佐賀市城内一丁目１番59号
発行年月日	平成20（西暦2008）年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積 ㎡	調査原因
勝尾城下町遺跡（かつのおじょうかまちいせき）	鳥栖市（とすし） 山浦町（やまうらまち）	41203	-	33°22′54″ 世界測地系 (33°23′6″)	130°29′12″ 世界測地系 (130°29′4″)	20051212 ～ 20070831	21,000	新幹線新鳥栖変電所建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝尾城下町遺跡	散布地	縄文～古墳	-	縄文土器 石器 弥生土器 須恵器	平椿式 太郎迫式
	墓地	古代	火葬墓３	土師器 須恵器 鉄製品	残存状況が良好な火葬墓
	城郭跡	中世～	堀１ 竪堀１ 石垣２ 石列１ 堀状の道２	土師器 瓦質土器 貿易陶磁 肥前陶磁	勝尾城総構え空堀その関連の防御施設か

佐賀県文化財調査報告書第178集

勝尾城下町遺跡

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書２

平成20（2008）年９月30日

発行　佐賀県教育委員会
〒840-8570　佐賀県佐賀市城内一丁目１番59号

印刷　大同印刷株式会社
〒849-0902　佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

再生紙を
使用しています。